狭衣

狭衣下紐二〜四
系図

十三至十六上

京乙
5
335

帝國圖書館藏

さごろも　二

京乙
16
335
特別

大正
9.3.3
購求

ガラス使用

狭衣下紐第二

一ものおもひの　躬恒家集に引　なげくもなげきもしらひぬる木枯にさえさえて消されぬるのおもひは花

一お花がりとの　引　躬恒のべ入ましばお花がりとの山辺草かれ所なにあるもそ志ふ之修　和泉式部（いづみしきぶ）

一わすれぬべき事　さ衣　飛鳥（あすか）井此君の所なるを也

一かのくぐりし式部大輔（しきぶのたいふ）ハ　大弐の乳母（めのと）

式部大輔道成　肥前守ヶ守とて二巻初にあり肥前
道季　守ハ系図にはなし
常陸守也

一あはれなりし　飛鳥井へ通ひけるも思ひけるをも通

帝国図書館蔵
蛾術斎蔵書
石氏家蔵
国立国会図書館　タイトル『狭衣』　請求記号　京乙-335
ガラス使用

も終(つゐ)に兄(あに)の道成はそれが御事を哀なるべし
おもひやり
一又あれど　道成(みちなり)も中乃飛鳥井すり此人を筑紫(つくし)へ
へおもてむきもいそぎたゝしき也
一大弐とは又はそれなれど　此段(このだん)ハ父大弐(ちゝだいは)が便宜(びんぎ)
り道成が父ハ在(えん)也それ故しとハ式部大輔がる事
飛鳥井大殿とはそこし絶しるべし
一道成がめまこ　飛鳥井とや上也と思ふまさなそなん
人とおもてむきとやせしとも也
一おもひやりさるゝや　飛鳥井おもひぐるしもおもてむきしや
心にて治気(き)も悪(あく)おもく(たちまち)ふ堤てやもやしくると壊(こう)

悔也
一此事　飛鳥井がおもひてさま〲の縁ハさらにとぞ也
一それの歌乃　あまりなるみそれならし事也
源氏宮のうすまひ出しを角(かど)とある也
一母宮(ちくごや)　母とてもいはれし流ちらしふかいあるな也
堀川(ほりかは)殿乃上をと　源氏宮の流母(父君)と流ちらしら也堀
つの上乃流服の大殿も御むすめの中宮(ちうぐう)まいり
給ひとく時め義紛へも源氏乃宮のおさなきむつ
び給ひんとも心ざしもありてつれなく給ふらし
一うきも堀出(で)の流(こ)かうも御(交)くのみ乃あそべも清抄(しだ)あれバ
ましてぞ悪ぞ偏さまる　おもひねといふかん年

の秘蔵あるへし

一帝の女二宮をさ衣へあつけ給ひけんとなり

一かしこまりは　此あたり　思ふあり卿相なとにふ

との勅定をかしこまりしかともあかりし　かの御んなとは

さ衣のいかにしく思ひけれと太后のゆるし

一まゐりつゝも　太后の御年来の御ねかひなとなり

かくあかしとは天子此御ん勅定ありともなくまよひて

一んはつゐね　かなはせられすして不可と出けれはなお

かく御門の御ことをとありなさ衣のいかにもおもひたちてのゝんすみ

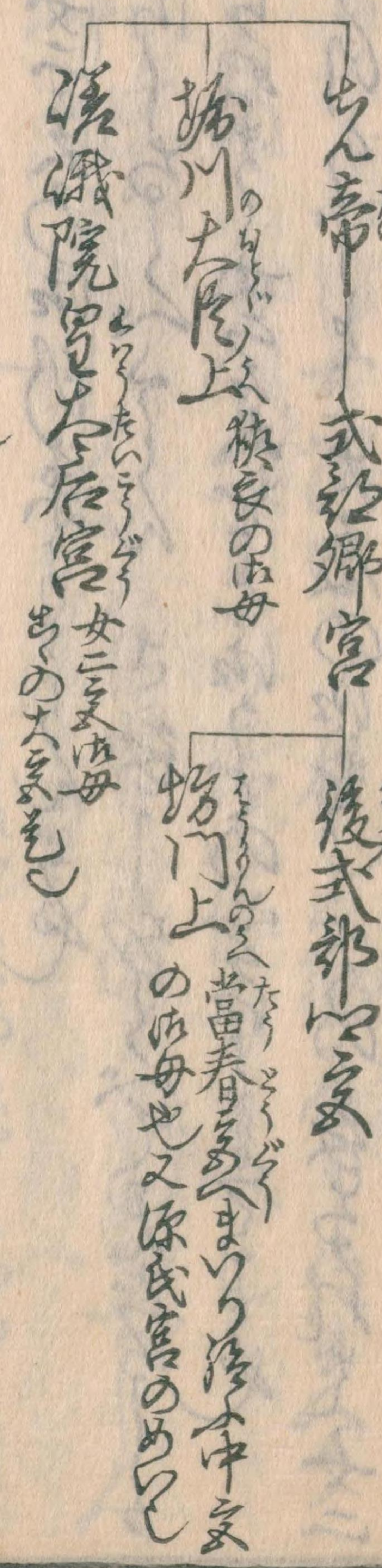
かなはぬやまとしく本歌の本意給ふとなり

一これよりはきせらて　世の御ことも此御んはしはしあなぬめる

又えいあひ給ひしとさ衣の御ん也・何るかたりか

かく狭衣此詞也

一さて大宮


先帝―式部卿宮―後式部卿宮

坊門上（當春宮へまゐり給ふ中宮の御母也又源氏宮のめのとし）

堀川大臣上（狭衣の御母）

嵯峨院皇太后宮（女二宮御母　今の大宮也）

一そ中しくあるれとも

又院ふ壺なそく御門の御んふあるなまして六后腹

にはおはせとれとももさしてあるまじきものかもあるとし

一中宮の　太后の御女腹（坊門上の）中宮にて春宮給ひて附

めづらかなる御ゆへ大宮もびんなしと思召んかとも也大宮と
ハ皇太后宮也
一いまはじめて　大殿の年人は加へる計にそあ
まして継（まゝむすめ）て帝此法女宮と得まゐる事こそと也中々
女二宮の法もまよかるらんとも也
一はしたなくやあらん　さ衣のおもふべてかんがへしら
らぬまゝ女二宮をとく法ほどの思召まてるとも也
一うけらしと　大殿の法もしさの衣を返れとも女二
宮へ見てこそましまし物しなれどもとし
一我も人も　我もハさ衣人とハ源氏宮也　かの法ん
もとめん宮（さぐむる）ほどハ衰て度さ衣にてあづかるんに源

氏へ宮思びるとてまうづくハ御弟様んよいとや佐とそ
一さばかり　女二宮をとかくまうら神てハ御をまゐりける
たりほどりあらんとも也
一もくさや　女二の法もとく后も弘徽殿（こきでん）ハ位まへり
宮の　后の上へまゐら給へ御ちなるべし
中務宮（ちうづかさの）　かね　あはれあ日の法遊に筆弟通し人
おやとも法とも
姫君ハこうきさ殿にて大将忠けるにおあまる法に
一大将のうちうちハ筆をよせめとて破給へるをも
かうちんかく宮くじく大将の男子よらんと云也
一ひ三宮をすや　さ衣の法目に三宮りと思召也

かはらぬをかはりての詞也

一宰相（さいしやう）中将の姫君のめのと一巻（くわん）にあやめの前をとさ衣へまいらせんといひ又あやめの前とも語也

一大弐乃むすめしもまさぬ　うへはまめやかなる法師　まさへ志こゝやさずしておんなし　世下字大弐うち女二の宮乃御乳母（めのと）也　いざとくとは継（ぞ）り秋ぶらくやとあると

一まのひ給ふ人　女房（にようばう）法了へ入せ給へと也　せぶもらさねす事（こと）ぞ給へり丁へ入給ふも女二宮は引給ひし　をとやがて抱みて加まへるや

うつゝにはたゞ揚（あげ）給へる残りたまはらぬ揺給ひんまくらて取おしさとも也

一みまそのと　法華（すのと）刻也

一かの法印く　女二の法みてあるべし

一志ゐのくり　中しくるめのかくれきいのちともろくらんとも也　勇の代ぬと勅（ちよくげん）とおはし表死にくへる法又いのちもある剣きとも　さ衣宮し

一さてやおくせ　さ衣と志らしめしていとぐれひりしことも也　女二宮乃法んも

一そらくもふかき　前も　宣年（いろん）

一かの教への　見（み）の代衣もあはしくへさんやいと

ガラス使用

ゆめのをしへきちるへし　世ひとへさしとも

一しみづれ　苔衣　引　君にあらんその日ハいつと
松杉の苔のしづれて物をおもそおもふ人　源氏
物かたりにある哥也

一大二条乃院さうし　堀川の母后乃御かた乃院へまゐりしさ
り又みそともやう四そうれだし人御あるそやさん
とそ也といひあるしあるも

一しのぶに　おもかあるきんしやを流るゝじと　さ衣乃
綱也

一きにうとまし　さ衣の将を女二宮のへも

一あすりこれより　女二宮と云ゆどかてもつゝ　あを

一むろの八嶋（やしま）　源氏宮のかいたる絵とかへ給へるとこ一
巻（くわん）ありあらそ迄におもひあたゞへ給へる也

一いつかしはるぞくめし　弟しきしこさとハ口つゝみ（たゞいま）
あるしこさ残乃るへおりて天子（えし）へ光をれうしんも
とも也　通（のがつく）をあるけうしんとも

一いのちヲおそれもそてぬいのちまいさ死ほど計
うれるまさげくおもをほとされ

一又かりハ　女二宮乃流れ残おもひとられあるがらやもし
後（のちの）ひ（ゆ）ま乃らひもつゝ姫にうんとも

一おりひくぬあるみ　おもそむさきあるうそうへの院ん
すりあぬかへしといおかりし給へしちかへらし

一左遷ハ　明くのとれなやと也　名謁

一かつらきの神　葛城一言主神申て役行者云く　自醜貌乃間よ作らんとて　上下界岩橋をかけん　日をバかくれて夜るくわたさんとせしも絶間多きとぞん成べし

一はちすの葉　ともしくハ人乃ぢうめんとも

一心細くも　こゝべき戸口のあきさるゆへあやまちしるく細しきとも也　やましひかへてあさくせん

すのもとも也

一そのすみかもち　面白詞也　むかしきとめ式乃名目あひて勘

一姫君のつゝミ　文紙などつゝミてをかしきるべての風ハあしぬるらんべし

一大将　さ衣へさんかうべしきとおもへ侍まゝもいうち侍んぞと　歎給ふる也　あるべせし人なるんかゝる也

一まのふきさし　面白詞也　さハとふあらくもくうみおもしまほしとも也

一中宮大夫　法性寺殿也　堀川殿ハ中宮大夫乃法おや中宮大夫ハ堀川殿の弟也　ひをかくされて下くふきを筆とりて

一うへの　堀川殿の北の方也　さ衣の法母也　さがりう

是非きもし給めくらうへきはハとの給ふなりやう
あめんはとてうちもうち世給ふ自ひをうまびうらと
ちうはくく義と中上を思とかん給へう
一同しきをそ　大かさい海より　狭衣の詞也
一ゆかの　引これ我を人おもはめて大海のゆられた
ゆさうりものおもふ法か　本文
一おがろをちやしぬ　さ衣のいらしさ線かんつあもと
あべし　ひがしかしりける八女二三文の法解し
一うさかたり　古へ此ぶりの大あらにゆらくるなりでら
人ハこれとこもことらてともちう
引あすまし　りまの也かんそしうる此がりのうちかすり

さけんもやまのとおぞしこ
一うらみねを中〳〵　さ衣のくれ也
一あきでん　女二宮の法宮也
一こ條さ人　中納言ハ大貳乃めのとのつまうと也
國へ大貳の乳母ハ下しやし　狭衣乃乳母也
一くもてまん宮乃　引事　未勘
一木のまろ殿　未勘　此云ゆくハ西かうおその事
みて叶し母宮のをまろにさやうりあがるん候た
てあふうとえんうや
一爲云法經　安樂經ハ未世ハ安樂經を説乃を
しへ給へる文也

へ堂乞貪食將ニ一法界ヲ剃リ云ハ法界一心ニ念佛ヲ

一宮の　女二宮を狭衣れ法縁ゝしくしくばらんさし

を忍ぶ名さしこと也中納言法の詞也

一外道（げだう）紙乃如く乃村女ヲ聖ひしそ婦をさるせら

也若女人又盛なる髪女と姉ぬるかとも也

一あふ法る　女二宮へ法綱の法名みなるへし

一ゐとゐぬる乃縁　乃なれ縁を力へとあひんまて應ら

料可為

一その遠は中りく　女二宮へハまいりせてきらとまつらひ

あらしな也

一あがつ未の　女二宮法らんじとめられ破（やぶり）縁へきとも也

一狭の縁とあり　さ衣乃詞也女二宮もとをもちらく見也

乃めまへ出るを也

一うらくして　一脇めや生ら義法んとうまて候

早（さや）く目ちあらしてハいうぶをも也

一おもこがまし　法らんしあるとのを也

一打扱（すあふさう）を押らへり　ものびてハあひ給へ丸ら雨むき

ぞさあ給ふもとよりを給へり　さ衣の奇ゝ

一男（おとこ）乃たち紙　さ衣のすべ乃らんがともあるべし

一法文をら出されも　中納言蝶（てふ）とへくも抑や

し給さまふん出るを也

一すべまで　女二乃給のきうしきとあかうしうべ宮

かへりまいらせ給へるに　御かりつる宮たちぞと
心得て宮たちつらぬるを　歌にはあまりひろく　何となく
何事めでたしとは中納言佐が事もの給ふ也
一中納言もけ　女二の宮枕（まくら）めと云ふ也
一あまりと給ふ事（ふう）　引哥として狭衣のとしけむ哉
みれ枕乃トスリあまりも給ふ事
一たびさちなしやと　さてハさ哉りあふ（あぎ）秋（よ）涙（だれ）う
あまるもなきらくうと思ふ也
一かごと　東路のみちのはてなる常陸（ひたち）帯（おび）のかご
とばかりもあはんとぞおもふ
一しのぶの森（もり）　未勘　引　わがおもふことのしのぶなりける

かれむ給へるからのくの枝まとゝみゆるも
一法くりまゝ　きこえあかしんまでは詞也　たゞなを
こきんとさ哉れおかせらるゝ宮んとうし給めさ花
ゆゝ也
一恋の名哥　中納言佐の哥也　あふさかまでもうぢ
孫入給へるは道（なをし）ハいつぐとも也
一あやうらいせれ
一宮の御文のこと　若君地し　面（おもて）向めて句をとさるへし
いづる宮事此あ宮ともと八女二の宮とくにえの
御事も思わびうちに忍給ふ心あるべし
右猿中納言へも御はきられざるとし

一雲の引　夕霧ハ色めきたてる物そ思ふらの
宮たち御人をもひとて
一かうの月は　道々の流る事　如流しぐく如也
此云源氏のこゝやの事歟
一此源とハ　源氏の宮也　私　女三の宮なるを人代付てみん
あるべし　ゆかりの上にまゐり御方へ参ん事まて
てよくよの事とハ茶事を能くよそり
一橘ひらき香んハ　上品也　源氏の宮をあてどし　又帝
秘ちゞ綾清らんじ清くし給て事に出る也
一みちきぬ　霧消　此巻丸のありし事の事也
一あふ坂山　引　名にしおハゞ　あふ坂山のさねかづら人
にしられてくるよしもかな
一いかさ侍りて　女二のミやの御かたの御まんとはなと
をおほし給ふぬ也
一いまでおもふしやうめく　女二乃あいの給ひし
胡蝶の夢なる源氏のへたちに侍らんもゝとゝ也と思ふ
実の夢也
一人まうまじ　狭衣の事也　引　松かうら嶋のうらひの
せあくれもせんこなみの康中ありける
一いくの哀ん　天子の御事也
一龍の　烏帽子をかへしちかふ河とすてに綾
あくまとも也

一あはつかにおぼゆる事　あはつかは軽念なりの心
なるべし
一きんぢやう　禁中(きんちう)行幸(ぎやうがう)の時御前(みさき)の警蹕(しゝむしろ)也
一ゆふしておもひて　女二へ大宮のゆふしておもひなと
一なやましうし給ふ事　女二の宮我身の御懐妊(くわいにん)をしり給
はぬや
一そのやうとも思ひしらぬ　是は大貳の乳母(めのと)が娘(むすめ)内
侍のをけはひ詞也　後是乃御文なと思ひしち
らしてまうしんとおもひ給ふらむと内侍也ぞ
我さくとは是乃詞也
一くめぐもへもとも　我なしぬ人もあらんかまの人まで

さあらじさ是ひとりをみくまのゝとの詞也
一あぢきなくおもへるほと　是は女ばうたちがおもふべし
一うかゞひかれがおもふべし
一たま線さらの　ひまなくをあふぎちうとぢんなる
ゑゞしとを知りし紙さんでち義隣とみておと
しける紙(かみ)也
一是みも松は　引(ひき)かしあまは是まも松を引(ひき)きにし
きらう君ひもとし是乃おもにてかめやまをじんなる
あるべし
一かくえぬ給ひし跡　肉侍んしき是は詞かいに
まぞおみなや

一大宮の　大宮乃御懐妊（くわいにん）と出家（しゆつけ）の乳母（めのと）なと也
叡感して内よりも奏（そう）しけると也
一あやしくの　相乃さかり也むまてにみするをとるとも
一きりにれおゆきに　故ありけり哀
一咲（ふさ）ちる姫　くれなし　女三宮斎し
一すんくおもふれ　きらくらされとハ　浮紋（うきもん）也
一かけたびめ　そめの紋あり
一おとろ妻あらし　ひあかくハ浦くといふ心
一さしかゆとくを　女二ノ宮をもちふち給ハんと也
一そのく　引（源井生）あきちふのとおく（藤原）まのきくし思ふかれど
おまちてあるどう人の思ひしき

一みなれし家の扇（あふぎ）めす
一人あまた夜　くれなり
一みなせの　俗伝（ぞくでん）はみくらせと云
一ゆかり　ゆかりくも御なくて也以月を時雨（しぐれ）なれも御出ま
まてどもし也
一雲井（くもゐ）まてあひのおもしろかん　人も給ハさ衣ふ
給ひしと也　大宮の斎也　三巻乃末にも故大宮
の斎と参りあるんハ下紐也
一はれある哉　さ衣れつまきあらくしてわりまれ
也天子の女三をまいらせんとも思ひき給ふなると
一出の比なり　女二の御産をきゝ給ちんし也

一わきまはみやうち　さ衣なれもえうちとけぬく
も此おもふとも　座上人なとおもふまじきなるべし
伊勢物語源氏唐の故事引用なり
一たゞふたまな紀ありきて　ふくみ袖ぬくさ衣乃おもて
しまほしきにほしくさとも
一此ゆふより　なつ夢狭衣のおきなに語めけれなる人をさ
一そゝや　中納言がなりたきとおもひて乳母わざとさ
衣らハ不知といふもことおきめ給ふるとひなきを
一なれての　引寄まどふみおぼし
一まことにけんめいて　此延喜のわたりんと思ひける念して今
までは右今とも

一姫宮さへ　法門乃法ん中今一度法門へ入らせまゐらん
し召ちかく法めとて人へくるしまいらせしる也
一あかしの身にて　さ衣の法師也法懐姫とまうしける
ゐの果ハかくのごとく八や年し我身のをとも
一まことに万代ほどまうしぬ　あぢけなくちかげききまへ
らせくる物がたりに如と也
一このほかふかし　さ衣をいとひ給をぬとせよなり
おぼゆる也
一まつての内なと　おもひてひきゆゑしなきにちかづき
ゐる役なめぎに思ひんと思ひさうとも也その程ど
のとき時くなにゆうらいり中納言しくぐひとらば見ん

しるき事あらんかのなとゝ也

一そのれはしく　引哥未勘

一ゐるのしさは　太政大臣とうち具してあつくだゝと也

一ちゝは志りせぬ　倍云（ばいぐえん）よりり　此云悉摩降死ス

一あまのうらそよ　我らし大衆あまく如法によしり

みつきあさきは世すり志てくずも姫宮の法んかなるべし

ひとつかあしんきかりハさ衣へあびきがくれ

はしめまと也

一まおとしちとでハ　去室（えんしつ）あまねるよし又ゆあり

かとも（ことばはづく）表の説ぞ頌

一あふひのあとより　尼よ如終りんろうとを奏して

あん内（あんらい）アセとゝ也

一ううあうハさあとゝとも也

一きあく　法ぐしれ尼髪のさしうりやしさるんそ

気にとうるしまりても法ののちを時のまを色付

とぞ光をまんとゝ也

一あおぐちあらべし　源氏文故也　ゆうあるらあひ

ちをはも源氏物語あつからんし

一志つまての月　清か細玄（せいかほそげん）枕草子（まくらさうし）　源氏ゆきも引歌

一おもひよりはもうかゆけれど衣の夜以月風さむきを

ちとどう嶋也

一我沖（がすい）我須（これ）ど法ぐりあ能登も物あうひハせし

ガラス使用

とさ衣んし
一玉藻（も）の浮あま　尼（あま）入道（にうだう）宮の事也
一まろぐく　俗（ぞく）にわろぐくと申ことゝいふ
一かくしあまの哥　さ衣のうた也
一みせこのおね　古物（こもつ）のあらはるへし
一あおまきや。ひろきうきや。かづらて縁されとも
あらびあひみかゝうかあひまくら　源氏宮の語ぞ
一苦しきまさりし　源氏ゑむむしきさえはげぶ上乃（むらさきのうへ）萃（おしわう）ゑ丸
浦（うら）の雪ぎせやあし　源乃さいびと雲ゐゆりきう
んとも天子の法あそこ（こゑん）あれだる也
一雪き絵ぎし　源氏物がりの巻をめくり

一ほれをかう　むかしけところあるべし　和哥人（ひとり）の哥
一いひまてゝ　清少（せいせう）としあらんとは清（きよ）んと云也。
攝八國（たかう）古丸山（わじ）也とも也
一雪（ゆき）の山かり　むかしあふの祢いふ
一りんわくは　狭衣の哥くれたまし
一おもむ平等大會（びやうどうだいゑ）　法花經（ほつけきやう）の五（い）品（ふ）也
一くもりもなくは　あらぬ不斷也　口傳（くでん）ありさ衣
御法のひもあらしそのん也
一ふかき（こゑゝ）さしのこしよきらやう
一宮いそう　源氏の宮へ哥をもおもはせとあり
一ありてちうやまませ　さ衣の法母よりありのぼる文ともよ

てらやませ給へるや
一そのかみ海にてかん示給へりしとゆうし當りお
ぼしければ　さ衣の御心也
一りとおもはじ夢　とまて八伺ちるべし　源氏の宮
此法自筆(じひつ)八おろかのじきるゝと思召り狭衣ゟよ
八まいてと給(らうせ)ゆへおろかまし哀なると源氏宮の
書べしと母宮の給ふ也
一わかるを　母宮也
一をとくへ　狭衣り源氏宮へをしへ給へとて母宮よ
りこれ法文をもしさ衣り久ん多給ふ也
一ゆうし帯刀つかりしめ十すべさ衣りもちいる事あへるとし

一今のめ法くいくせ　清累(きこえ)をせにそのめて久しき
とのまゐらる法帝ちるべし
一帝りいとをかしくうちそゝさ給へど　先母宮の御
詞也、まいそてくるさ衣也、の給ひすまでさらとそ
をかしへやさそにハとて
奇一末の世をも　清をもちてちかぐくお底ごとくちる上給
ハくめのうつくしとも　源氏宮の御代さ衣よめり
奇一そよ法くらり　さ衣帝也　小篠(をさく)八さ衣の法勇声
あてくまゐる文の法くるよをかくまで給へり
一みどりの事則　那波浮刀のかつ紀夢の中り妹もち出をも
てむの世残りけりてよのとや

一あまくるみとも　とをつけへきあかくれたることに其文へ
源氏文ゆへ以歌一字もなくむつかしき詞也
一ことわりとせいひたつかく　女君のとをさうする物なる
とそいりて法蔵ぞうるとてまいりせ給へりあさ
子れ給　さ衣あるかしめすまいちろとこしへだ
我をしハさ衣也
一えさぶらふ　あくかどにちかいく事あるまじき
なるや也
一うちそむかん　源氏文も
一引やり　さ衣のあまそでものせちとあるゆへも
一いそや　源氏文法蔵しをへぬとも也

一さし山の　法くだ山嶽山またけ山きぎくれたく思ひ入
たりハ法のつくぎまたれり　されたか大庭乃法んとるかな
禅（ちぐり）ときまかすとも也
一ためしそ　かの忍ひあん様ハ何をせんいけるなたのゆめ
給へそく人ハみまくちりしそれ
一まいのめかうくちかわん人乃　大弐乃乳母（めのと）の妹なるに
似まも人ぬとも也
一正月より　上落（しやうらく）して飛鳥井乃なるかゆえくくあやしげ
しめすに西向（にしむき）事なかやすつるでまミ川りな
爲も似かよ義とやすす　次（つぎ）八かうしとふうくハくまて
なりかちのくうあかさに物語のさとも也

一若宮の　飛鳥井君の腹にて　誕生あらんずる若
宮乃さ夜あかくんをと思ふ也
一流くへきと　哥ふかき心へし思ひ　あるべし
をとこせよ句をときたるべし
一恵ハ乃はれなく　そだんをふるずとうるあし
ゆはめ哥にも也
一いまそ見んと　飛鳥井君の詞也　我をいけて
みんと思ふなぐさめへさるつ哉ゆへし給へとも
一ゆくふ水　あふぎにかけりる一巻よあり
一うしほ海の哥　狭衣之これなし
一あさら山哥　狭衣哥也源氏乃ざくらんへ似たり

ぬくし
一うきなをたつ法類の森　源氏のゆふへ仏へ手にもしれ
あひ寸ち給へりし也
一いとあさましのやう　こせふしのち思ひハ忘れ給
ざりしを刹割乃やうすハあかりしが扇御
覧すそてを附のごとくなるとも也
一かるに　唐絵のごとく女乃かきたる扇給あそし給ひと
かん給ふ也
一浪川哥　狭衣のこれあし
一かの宮の女　女二の宮子　五十日の法講也
一その後　いその後女三の宮女宮をも見して法華懺悔

ガラス使用

一あるが世中にあらましかば思ふ人のあまたが
おほくもなりにけるか

一ありし世に　又女三をとさ衣へと思召なるべし

一大将のこと　さ衣のこゝろせしをめし出されて也

一むさしの　引寄て動ゆるそれなるべし

一袖の中まで　引寄も動　私動君にあらざりし袖の
中まで今ぞ我かたましゐのあくがれぬる

一いとくるしくて　法出家より申しく法ぬるなる
ことさ衣へ中押（とひろ）也

一かくこう　女二の宮也　底（そこ）のわけは飛鳥井女
の法ぶ（こ）めし生　誕生（たんじやう）あらしむと也

一ちゝのみや　孫ぢをくる母うへ也ともに法ぶみ（こ）だてまつり
は宮のとくんのもをと也

一おもひうるさく　縁（えんぶ）ぶのきあくともなき也

一中宮いと思ひづく事ある　おなじあげ奏するを
いとゞ歎（なげ）しくハ中宮の法歎を天子又流なる
しくかん語へるとも也

一大やまとうたくし　ことのもとまめのむかしうとも
ともそもとも忠しぬあり様にて　おもひまする
き法（きこ）えんまで歎とても　いつぐさき白　さそてうい
ますものにはかも思ひまするれめと　あかり（ふる）なる
て法出家とも也　面馴（おもなれ）て

一　新院　女一宮也
一　さおもひ　さ衣ハ女二宮をおぼしとも
一　わか衣を　あはく此縁（えんなう）よりもさ衣にあづま
路りんせう也
一　おのふんことちある　天子の法師也　独住（ひとりすみ）をもゆへあ
らんとおぼしめせ共閑々（しづく）ハ志りだ法遺言（ゆいごん）あり
ぜをろう御はあらじとも
一　うちかり　一巻をもある絹してぬぐへおかせ
らあらくん也
一　新院のおかし
一　さしきまれ　女二宮入道宮又女二宮とも也

一　御かへりそその給く
一　墨衣のゆきせ　めでめでて左衛門督も法師の説を
おぼしめしやりて墨衣の法師中ハあきれ
あかうとも也
一　女御代（によごだい）
一　志き鴫（しま）の羽まとふはあらぬと立弁に
一　秋色ハさ衣也　そくのうしハ源氏宮さんひかせ
おもひかけ給と御覧給へども　おぼえりまぢ給
翼しらじをとりくたとて引おりで大納言の
あやしくて狭衣に引給へとて指（さ）出させ給も
一　志のぶる絵　狭衣哥も日記するゑとも了悉

のかざり袖におもしろきとや〳〵也

一くるしきや又やとんかんまかりけるとと

一嶮きとこうのぼたよう　山へあがりてと云心なるべし

私勘古今　まての山葉をとかくぞをみし清き義

人はうさもなんおぼえじとて

一夜がへやせんさきんぢうち。わづらひは此野がしきの

原萩が花むらやさ云達　催馬楽

一ぼうり都として　上臈あるべし又調子をとらず

といてのん也

一うれみの〳〵　古物語也

一三秋而宮漏正長空階雨滴

萬里而郷園何在落葉窓深秋賦張読朗詠

落葉ノ題下也

一秋風つれ〴〵ともなかりし　一品ハ一条院のくれさせ給

へるまりなり大膳よりも又おほせさせ給へるとし一条

院姫宮也

一夏の洞院　源氏夏也　紳紳より御身は堀川

屋の夏中にたえ給ひせし夏もへゆくれあり

一ゆちゆく　さ夜の清んあり

一あしそひあは世　司奇来勤

一うしろ園の中将　故事来勤

一大武　物言して三河へ下し旅

一まことにハ　女院に御なやみがちにおはしまし日
ゑぞくらんとおぼしけるを女院ハいかでか
さハゑぞくらんとうちまもりて思ふ心を理とぞ
しくかんがへてし

一尼にあかぎんぬうハいつぞやおがうかくまてあ
らんと䛕給へ給へり女院へも尼法師ハ出入許
なかも令此ゆるしありえあひ給りじ　今より逢び
がたきと也

一神山の哥　しのべかざいハ　しるしもゆへりゆふしそく
祭とやし逢べぎぞみて逢ひくのかさゝまり

一大津宮ことぞ　可勘

一かゝるあやなきさ

一ちとせのかくかん

一我恋の哥　引　我恋ハ行衛もしらずはてもな
しあふをかぎりとおもふばかりぞ

一女院はまいりの日　女房衆乃神也

一一乗の門をうた　法花一乗の門なりとあるべし
二乗ハ声聞縁覚を云三乗ハ菩薩を加也

一みたらし川　引　恋せしとみたらし河にせしみ
そぎ神ハうけずもなりにけるかなとあるを
ハ本哥にて神ハうけずものかなつかふと也

一なふやさハ　狭衣むつましくおもはれてきこゆるの憂別

あるしとや

一よし流浪せよ　此世にあるへしとや又遁世(えんせい)の

んちるへし。此あるしさ様まてやのてにハあれとも

一大将の宮壺(よつ井)殿(との)よ。此文字入(いる)ずして可終とし

一かう野にもし　引いれてよの世線たいとりんへく

そ野宮も山ふもしまてうるゝあれ

一後にても　源氏乃大将まかせし更にもし

一みかりん　狭衣へさ衣のまいり給てもよし

一ほうらひ　楊貴妃(やうきひ)と合めり。源氏方も貴妃り

狭衣を蓬莱(ほうらい)にして也

一りゝ後まいりとぞ　大宮ハ狭衣文一条とうけておもし（大宮の姪(めい)にて狭衣ノ）

まだよき衣の法独行(ひとりすゝ)んみゝとある紀やうも也

一三宮の法をうけハさ衣乃法んかり。あかにおも狭衣ハ

又女一宮あれとも太宮の母也し　女二宮ハ法入道

（狭衣の母宮也）三宮ハ斎院　文法師(こうほう)宮ハ（女二宮狭衣）一やうれりのとや

一弘法大師入定(にうぢやう)而三会(さんゑ)の暁(あかつき)をおもひ給ふ高野山(かうやさん)也

一我もさやうり　まへあのしずめまふ給へゝるとと

さ衣の何我うけて後もさやうに心おかれけるとし

一よしの川あまり也　狭衣哥也　源氏意なをあひ給

まあ中ゝとや

一見えぬ山の哥　同ん也

舎川乃うへまさ歌(月やうへ)の我あまちや下よあまちて

ガラス使用

恋にもちゐん　古今

一かのこしみ川　能尋井　恋のよみちあるべし

一うき舟のゆめより　狭衣よりかくなしへよとも

一是人命終　普賢知法花書写の功徳より

よりて天上に生るゝ是人命終當生忉利

天とこそけるとも

一さゞ石山とぞ　此寺に引石山をみつるとし

一寺の堂僧修行者

一薬王汝當知　如是法人等　法師所得偈也

是経難得聞　信受者亦難　如人渴須水

穿鑿於高原　猶見乾燥土　知去水尚遠

漸見湿土泥　決定知近水　薬王汝當知

如是諸人等　不聞法花経　去佛智甚遠

一我尓時為現　清浄光明身　同じ品也

若説法之人　独在空閑処　寂寞無人声

讀誦此経典　我尓時為現　清浄光明身

若忘失章句　為説令通利

狭衣下　紙弟二終

京乙
16
八
335
特別

京乙
特別
16
335 八

ガラス使用

大正
9.3.2
購求

ガラス使用

蛾術齋藏書

狭衣下抄第三

一若紫のたゆたひもせまし紀を　枝しなるゝ本なるべし

口伝在之源氏の夢のことをふくめ給へるなるを

一うし給ふべく　太后母屋なとたのむべし

一もし明け刀寺　天の紅装をし明ては九月みちは憂人

一さもぞ恋しかるまける

一忘しきもはかなきもおもはし　源氏乃文なとも也

一かみさうし　紙障子也

一夢ありし　刀寺　路にあくたなりしを　船行の今はなし

人のやまさしくる人妻

一ゆきさら人里　いとたえぬひまなる道もなかるとも也

ガラス使用

一やまとの川なみ（かは）　引寄（ひきよせ）未勘
一つゞがおもひ　遁世（とんせい）するべし
一雪（ゆき）やまを　湯（ゆ）あみく法養性（やうじやう）也　俗は白やまと云ん
なるへし
一阿私仙人（あしせんにん）　かく目の法師（ほうし）を云所に　釋尊（しやくそん）因位（いんゐ）の時
太子として法（のり）乃王あに位（くらゐ）を授（さづ）く　阿私仙人（あしせんにん）に逢（あふ）
て法花経（ほつけきやう）を説給へりされば千歳（ちとせ）の間　菓（このみ）摘（つみ）水汲（くみ）
て仙人に仕へ給へり仙人（まことの提婆（だいば）也し
一いなかがち　引寄　年をふる瀧（たき）のうに遊（あそ）ぶは八雅の劇（げき）
乃瀧（たき）まきれとや　和州（あまそうい）名所也（ゆゑ）
一さるさはの　飛鳥井乃邦也　池の玉藻（たまも）と八

猿澤（さるさは）は万葉あきてんうねめのよみ有
一あやめ草（あやめぐさ）　浩子（こゝ）のことも也
一斎宮（さいぐう）　女三宮（みや）也
一前斎院（さきのさいゐん）　女一宮也
一やうく住吉（すみよし）乃里（さと）
一京よりかは　源氏（げんじ）家よりかは八條家さりし（とこ）
一さるなき葉（わき）かくと云詞（ことば）かは海士（あま）演戯（えんぎ）かと也と云
歌と同心なるべし
一おなじさまをみもと　斎院（さいゐん）を也
一さがみあんあると　入道（にふだう）の法門を法ぐしさ給くと
しそのんふくし女二八ちいらきて也と云師也髪（かみ）を

ガラス使用

みじかきとハさげ尼(あま)乃髪(かみ)也

一うちかへしを奇　かくれなしとそ女二ハいふやうに

おもひしらんぞ也

一めさし

一ちりはらふも　女二宮乃古枕(ふるさまくら)とも也けん銀絃ようさき

給へり

一かゝるのこはかる　是よりも入道の宮乃御心中(しんちう)也

一あはれなりける御心がらさ　母宮の御心を思食(おぼしめす)也

一うちすゝ　母宮もなくなくせ給へるに入道宮なげく

入給へ涙(なみだ)かうかりとも也

一あまりぬれば　若宮(さうし)の枕まかり一巻乃契(ちぎり)のあまりぬにや

しづくなる也

一はじめつかたハ　中納言(ちうなごん)のさ衣(ころも)乃御なやみを御覧(らん)じ

てえおもひしまげ見えぬとも也

一おほさるべし　双子地し

一まことの御子　度まで若宮(きんじう)乃御子(に)也とハおもひしめさ

ねども養母(やうぼ)の御ためにハさてもあるべくよからんと度（堀川殿）

乃御子なるべけれどもそれも御養子(やうし)ハ同じ事なるべし

一母ハ内(うち)のも若宮(ちんくう)の母(ちゝ)とハ御覧(ごらん)じしとも也　堀川(かうこ)殿也

いひ給へるけれど　殿御子(みこ)と（ちのう）也　天子にも

の御子なかなかくハあるかな御心なかるらんとも也

一さゝさ乃宮と　太政大臣（後一条院御祖父）一条院女院（さ衣の母なり）

東院上（とういんのうへ）（堀川院の中宮 今姫君の養母）

一 おほくのゆかりと 大政大臣（だいじやうだいじん）

一 かの御ゆかり 是（これ）ハ堀川殿（おとど）也

一 ちやうの御きさき 天子の御母を皇后（くわうごう）と女院乃御后（きさい）を后宮しおきさき故院崩御（ほうぎよ）已後ハ花くしさるゝにてと后入道して尼去堀川殿の后宮さうらんハようらん也

一 あとさき 堀川殿ニ子にあらねど只女院の御まゝ子にしておやとさらるゝ也

一 此殿おほくかきしかたまでまて句 おもふうでおもらぶ乃御とく（こう）なりしかはいま女院の御きさ見まいてハいうべき也

一 さくらかりこそ

一 はしたなくいふ さ衣へ給らうて詞（ことば）也 女院して天子御ためらるゝと虚言（そらごと）也 御まへの御すもとをかくさん衣乃詞（ことば）也

一 つまやかれ人を あかさるゝ紀より琵琶（びわ）なとひき（ひき）あそり給ふてにも今姫君（ひめぎみ）もさせ給ふて御ふかう候ふるとをねらすもうしく志紀也琴（こと）をおもし（こうけん）さゆ分人とかへると思ふを安（やす）くてひびその後見して来りある也

一 まそかく 次く也

一 まるさの馬（むま） 牧馬（まきのむま）くるふ 説あり

ガラス使用

一かうかんに 笄とて上﨟也
一うへざしとも い后姫君の事也
一そゞしけん さ衣法出の時いつくへともくおもてるとて
母代腹立しける也
一かのそく也 さ衣よりかんかゐへる寄をと東流の
うへにあめ給ひしうと今姫君まれくさ給也
おとと也 綱にてつくし
一吉野川あふみは淺いとせ山人へあの男ありける名
のこあらがれて おほむ母代か寄をそ枕りく吟じ出り給
へり給へる後までさ衣の事也・まだんへ乃言ぬか
やよみおもりなんなきまくさ衣乃住んれ文字

ゑる此枕ゝへさきれ
一吉野川のへさく まのさハ文也 源氏末摘にの
衣又かく衣かく衣の等類也 さ衣ハいもとの
如くを紙あづくわしまし給へり
一瀬は入立ると とかあるまじくれバ一ゆくるもん
をとゝもし給へり
一まづ猿をつるを かるでもよくと肱まではくめまで
ゑさゐうあかくいてち寄めつくらあをこまうつハひや
うしろ川をうりまでハあるど・ほそめハおそ同也
たまうへりく
一おもしあげ 甲しあり也

一實に一偏(へん)にようえんの恋もおぼしめさじと也

一若宮(あまりひさ)法んかるゝと也

一ろんのえびうしこさとし

一女院(にようゐん)かく　東院(とうゐん)のうち乃法ん也．時く行てくら

とはと非思はいるもそひ給はぬ間(あひさ)なるべから

里こなたく云詞也

一あつちもと装(ひとろ)了　未勘

一繪よ菊代(あいしろ)柳(やなぎ)桜(さくら)を　哥合(うたあはせ)よりうたをぞめれバ乱(みだれ)

うるとも也　不失(ざるうせ)類．ゑりぬくハ　ゑり入るごとく

也　源氏(げんじ)末摘(すゑつむ)了ある詞(ことば)也

一わが法ん乃　母代のこと也

一よのつねなるまじく　さ衣云詞也．人の文とハ葵(うれひ)身升

へ遣給ふ文なるべし

一ようゆるさじとの給へむ　文なれどゆるしなくさぬ物

とかくる也

一(寄さ衣)あはれなる人の　源氏(げんじ)夕顔(ゆふがほ)乃巻(まき)の哥(うた)によるとも(きし)かそら

まとんまて明也

一かきてまん　引哥未勘

一真木(まのき)柱(だしら)　引哥　王紀とこぶこそよろしぞふ

真木(まき)柱(ばしら)もむれましを　かくあんとさへむ

一かの扇(あふぎ)　飛鳥井(あすかゐ)乃今そめ時までの扇也

一筑波山(つくばやま)　はやましげ山しげゝれどおもひいるにはさ

ガラス使用

かゝぐるをきり　そのありさまは楊貴妃のこのみなるべし

一おびたゞしかりし　懐姫あやしき水に入んことを

くしれとぞ

一ももか　百日也

一人のおやの　引歌　人乃親の心は闇にあらねども

子を思ふ道にまどひぬるかな

一遠山鳥　画ぞそへてある也

一あらはさゞりく　源氏若菜の巻にある詞也

引歌　ゆふまぐれたゞ霞かゝりのかのものは暁がたく月出る

注　定家卿

一秋の夕も　さ衣のあくがるれんかなるべし

一云何女身速得成仏　提婆品也　舎利弗龍女に

対して五障の女の身としてすみやかに仏にな

るゝあるまじきことの給へる詞也

一みたけの　嶽と云山　行者のこもる所也

一太政大臣　此院也

一すゞしや　堀川殿の其上と東院のうへのことを

語へり

一あはれ　吐字顔　天下にはいじと異邦あり

一浦かけて　月のあはれにしと花の歩にいとよ

げとのおく浦も秋もきゝてぞ浦通とあるに

て西國の受領とも也

一 月日ことに 御読経 一条院
○女院 後一条院后 母 太政大臣御女
○姫君 後一条院御妹の姫宮也 一品に嫁給
○女院さ衣のはうくしの御息女 飛鳥井君腹を
養給へり
○藤壺 心もはかなくてかゝり給へるとも
一 賀茂の川 あまさ 斎院もおりさせより一品宮へお
勅命嬢して出家遁し給へり
一 一条宮 一品宮 飛鳥井姫君を養給ふ也 一条女院
おはしまし 若宮のまします 一条宮と女院法皇近きとへり
一 ちうさてん 中務宮の姫君 さ衣三ヶ所 秋のゐと

一 やまき川寺 春の夜のやみはあやなし 梅花色こそ
見えね香やはかくるゝの哥なるべし
一 権大納言 東院のちゝ 此は堀川 弟一品へ仕へ給ふ也
一 中納言君 母は内侍の乳母也
一 大納言 ほうたる人は大将兄付られたるを
宮の中将大納言へはまさる人が大将へひくとお
ほどらるゝ也
一 みづから 昔さへしとはれるをみんさとん
のやうふとあり
一 はらひがたりあへるん あさきなんの泪も 淡ねと
云んなるべし

一（哥）おもひやる　身をさらぬかげとさきだちて
魂(たましゐ)かりてぬれ衣(ころも)とさへなりにし
一さればこそ　おもひしと堀(ほり)川殿の仏(ぶつ)事(じ)なるべし
一よるのきやう　さハ
一（引歌）この世の濁(にごり)ぬるを　あまれけるまでやんひとつを
定(さだ)めぬる
一さふらふ又の偈　入(にう)道(だう)文とハ何(なに)ゆゑとやらん自他法身ゆゑ
なりやうあらし　み一品(ぽん)の文あれど八(は)ちとくもさて后(きさき)
に如らうし　上下略
一あんよのあまとある　入道の文乃法(ほう)也
一前は(?)とし　寺あり可(か)勘(かんがふ)　物手(しゆで)と云和(こ)列(れう)多(た)

宮峯籬(みつそりのかいと)はむかし天(てん)女(にょ)ありて一銭ありしがかれに或(ある)
時はかれに月の暈(かさ)降る下は小女ありてかれを葵(さいは)ひ貧(ひん)
女(にょ)は孝ありて菜(さい)を摘(つみ)てかれを養(やしな)ゆる聖(せい)徳(とく)太子
行(ぎやう)啓(けい)は見てかんじ給ひてかれを宮に入れ給ふ養母孝行な
る也　私云此故事不審狭只候は物のけはあるべしにつきれ
一すくはれずは　百の漏(もり)の銭法も乱(らん)してさらさじ
と契(ちぎ)らざらんとも也
一ひとつもとの（哥）　狭衣(さごろも)也
一（哥）なをとひく　椅子(あそびし)にみて　若(わか)宮(みや)の銭入給ふ文へ作
らるゝ也　きぬぬ候とハ入道文とハ自他法身ゆゑ
ぎやうやうなりしは一品の文あるとハおも也

ガラス使用

一（引哥）あまの河藻に住(すむ)虫(むし)乃秘(ひみ)かしと書(ね)紙しを奉りし世をすぐしつ返ん

一さしふさる紀ことも侍りしをて　いつぐ云申とも御

家しこの刀んて侍りきらしとも也

一なし嫁べ妻(づま)　むかし相続あるべし

一ゑふさしそ　大和乃おさめぬ好文と知り絶

きまんがすでかしあれども是しなるし又をしまうく

尚く也

一いとうくつける　あるまけるも尚くまるを切(きる)べし

さるてをんなくう

一みづからの清くにあれと云申されば　いそやことなり

入りまゝく　あげますて侍しは関(せき)の戸と云

ゆへありても遠(とをく)とも也

一そらくまゆかくらく　むかしは云なし絶ゆとし

さ衣のたゞうちおりひさると云なれ(ひ)首(むし)も今(つま)

も同(おなじこゝろ)んも也

一そひふしへ前し給ふ　何ふれぬも

一まだに被ふはたましぬ　引哥　住めども紕にゐまゝ

ぬめむ八へともみぬめの流也けり　古今

一此洗う　哥此心を明し一本の文のうまてめり

新　末(すゑ)あすハさりも絶ゆとに云ん也

新　一あわれ世へり　狭衣也

新　一憂(ゆめ)りとよ　みうた哥詞也　面白からしとりつゝかん

しほやくるがつらきとも也　まくのごとくうたがひなし

ハあやまりしといふ也

（哥）一下萩の露　きえわびしとは　命はあるとても

とふらんべきとまでも　あなどりて　末来ぬ風のする

とてもさもをとらまぬやう也

（哥）一憂身にハ　秋ともしらずゆくへ風の音あらくねとも

あなうこなはあふまでするとも也　あまたくへりの哥と

うけくちあるべし

一猿面みそく　一品の宮へまつり給ひてくハとの御也

一あたの物かたり奉　古物語あるべし

一うたかた絶し　入道宮狭衣にそれは篇すさ

ひの哥也

一世をいとふともすけ一ゆく源氏宮ゆへ入宮宮あふとも也

一人やすらひ　因果といふ也

一たまづき玉章　引哥　杉をたに初尋ぞきゆるうた

ゆゑ事綾けてまつらん

一せハあふし　青苔紙　朗詠上雁下ニ　碧玉装箏

斜立柱青苔色紙数行書　菅三品　箏と紙と八

天の晴たる沖に柱と書と八列なる雁によせたる

（さ衣）一それ世ぢやハ　入道の宮へ也　とある狭衣の後ある

（引哥）一万葉文あるべし

一扇の占葉れ　朝霧晴ぬのこひつゝをぬ世中

のらき
一あまのせう　左馬頭歟　右馬頭歟
一埋れひさや　葎（むぐら）ハ一条院一品宮耗やんかうたは
心ろりハおち為（ちく）てとらをしらざる書ぎ（りき）侍ごと
一古々　一条家も浅茅（あさぢ）の巫にあんらん也　今あそハ
一東へのまか院（くわん）をもとまつくおかしめ寺を　浅識院の家之
一海ことに入道あそたり也
一まうずしぬありけきおかた　さ夜寺まかられまし
一院（かん）まは一条院女院一品宮乃御母也
一まゐりんかる所　引寺　杖萩をまうしみまて　鳴藤
乃月まハ見てとをそ　まのさやあさ　去くのさう

そく月山は見てこねともさら也
一とのもかくまざり　伊勢（いせ）があさう文ま絹ハかくれ
して寺まゐりまゐらせ也
一文まをうをもあそて　又御海あまくへきこ打まて
紗へるはつとあるとも也御んま入ざる所なるべし
一悪筆を洗ぐくて見ん　自もや為家乃御る也
一ともら而やまく世院　独住（ひとりずみ）まて御心あかあかさまく
中ら也
一そのあまくさ見ても　又入道の家もしらぬ給あるらも
一さゆりをあられ　入道の家乃るや
一室（むろのや）八濡ハお巻の寺し入道乃家まり一品ハとをり

給へるとや宮の八講ず可勤（又義入道宮方ニ勝給へハヲダニ縁氏
宮ハ思ふ上ニ無比ニシ給ヒシ上也）

一垣ねにおかり　心えの添るおよは奇なりし也

一やまさだめれ　宮は如給へるも　様子ゆへさうなき

の疑は入道宮也

一おなかり八大方みなく縁ある一かどもあらまし

しきやうとやさはいへどもあやうくてハたゞこ

ありしばしと申給ふ也

一くやしと　尿をも亂しとかりめぐさんとし

一びをおとみく秘琉璃し給ふをめぐさう

つゞが給へるをおしんぞ也

古今より
一三吉野乃山のあなたに宿もがな世の憂時のかくれ

家にせん

一よもぎれだにさびしく荻乃根　疎勤へ

一宮乃日とり　父宮と宮と同じやうに一品宮へ

ほうとくしまをいつきあまりきをまゐらすとし

一普賢乃清浄現の秋乃誦経を営すゝむ也

一とのゞつま　引琴ある人へ之頌

一まれとかうのとり籠　う吉野のぐさハ八代流布也

一むさし野乃　承られなし

亭やかやし　蕭宰相殿へ易事

一女院あそうるの姫君乃殿　さ衣の比子のころ

一物さるか人へまをかなるにおもど　ほどくの慈別

あしとや

一（引歌）あはれなるハ浮（うき）世をまたやも海人（あま）の塩焼衣（しほやきごろも）海

ぞ添ふるらん

一八重たつ山の　引歌未勘

一思ふ事（ごと）かくれなし　さ衣

一あさうちあへて　汗（あせ）歟

一おそく成り　入道の文あるへし又一品宮文歟

一文付たる雜色なり

一かくつりたりとてもゆるく　一品の宮乃御文也

一宛（そう）あかくさ衣のんなきしれ申さるゝ也　常よ

うけまく〳〵しくとも　同

一（歌）思ひしを又おもハむべきかは　しらくれなし　一品（ちうく）の宮乃

御歌也又思ハむへき身とハ狭衣大将をさしてそ

思ゆる也　あれよりさ衣乃いさむるへし

一たえ〳〵末あまりたるにぬまはは中〳〵

（引歌）玉ふくつしもとも末あまりたるにあれ〳〵たくぬあく絲の（玉ふでまたためまさりけん　伊勢）

うまつしきとあはしけんゆへとも所（でし）稽首の字

まとそとゆるへき　所（か）歟

一院ふとかくる　女院也さ衣のははとハきこえし

給ふ事ありけるのことを作られる也　法のへき

らぬともハさ衣の御也　私云　女院法綱也

一御かハ女院の法綱（こと）大将ふとゆうしかり給ふる也

一おほかたはみそでよく延喜(えんぎ)あかんとおぼえ院(ゐん)も　嵯峨院(さがのゐん)也

私　女院乃御子也・の給ひ給ふをからうじておもひつゞきてこと葉おほくいひはづ事給也

一安給へる(きく)　さ衣の御子と云(ふ)へる後女院にて給ふとゝ也

一あまへらく　あまゆる　俗(ぞく)語也

一はるゝくなしまでとも　さ衣の心詞(ことば)也

一又いかに　女院の御心也

一院乃御ことく　さ衣ハ心　さもあどうるわざとぶたあるく女院ふさく是を　女子ハ御子もあまりうらんと也

一かしこみらくハ　女院まてハ誰ぞ也おとなしひ

みとさ衣のいひなし給也　さ衣ハ御心女院ゆゑくの御用(ようい)こそたへがたし　うちぬるひかるゝべくれどことなしひふいふことゝ女院かてと云(ふ)ん也

一うちつけ事ハめさるゝとなし給ふとも　次(つぎ)なしふぎてともかくうちべ(幾)あるらなど、扇をてうらんとも也

一海ハ秋しと　女院御独(ひとり)よ侍るまでともさ衣の御子みあるれどとも也

一院(ゐん)りうちもくれ　さ衣乃御子とハおもひもられざる

一みけかられ　天子(てんし)の御代(ごだい)みじかく大后へおほせらるゝ

一年ちあうし　炭(すま)びらのごとくちる　松明也

源氏よおなじこととなし

一そのかみの大殿とハ故殿　さ衣乃御父なり
一後見もなし　さ衣と似給へるを後見にし給
ふ也
一さるにてハおほかたは　入道宮ハ連枝（是よりしてハ前也　一品宮の事也）のがれがたき
ともに心ゆかずおぼしめすに
ありけるゆゑにさるおほり斎院なりけり　いとど深
がれは入道宮は出家遁世給ひし時也
一入道乃宮と　嵯峨の斎院故院連枝おもひ侍ちなし
時乃ゆゑ也入道の宮とあひしらひ給へハ空しからぬ也を
いたづらし也とぞ也
一あさましく　ぞ　かくかくしたやとハかくしぬと

て尼君もとをさくも宮にもとも也　一本尼君を姉君ごぬと
一院ハきこゆ（海士のかし）　前斎院也
一小宰相

常盤尼君
小宰相（一条院の女院の官女さ衣時く物の給ひし人　出雲守が娘又ハあらず）
筑前少将

一姫君　さ衣の御子　飛鳥井殿也　ひそかにしけれ女
のゆゑなるべし
一それくに御なりつるそと　さ衣ハ一品宮乃御志
ハわづかに御なりたれさるやうに也さき
御前に一部文までふかくなしとも出雲合たかるく御物ゆゑく

ガラス使用

世をそむきてみ山に籠給ふ也　出家し給はゞ尼になりなんと云意

一 殿ぐち　堀川殿がた也

一 斎院　賀茂へ大将おりしまつる也

一 志のぶ　源氏宮へこがれ袖絞る心也

一 婦せんれう　浮線綾

一 くねぐしく　一本には猫(ねこ)をそひくゝべ給へり

一 岩間(いはま)をとくゞる水(みづ)　引歌未勘

一 ゆかりむつび　一本とさ衣ゆかしきと也

一 御前さ衣　源氏宮へ通し遁世(とんせい)もせんと常(つね)に

一 （哥 さ衣）催しまつ也

一 （哥）くり返れとの哥　一本家語み思ひけるんも不叶(かなはざる)也　源

氏宮ハ人の心をしりたまはんと也

一 七僧　七人僧供養(くやう)也　源氏より是(これあり)唄(ばい)散花(さんげ)など七役也　威儀師

一 （哥）くる紀よるも　夢中(むちう)の哥　くれあし

一 吉野川(よしのがは)　前(まへ)の哥あるべし

一 （哥 さ衣）もとくまつしと　死出(しで)の山路契(ちぎ)つましよ自水(じまい)ちるまで

むご三途川(みつせかは)あるらんと也

一 皆如(かいによ)金色(こんじき)　従阿鼻(あび)獄(ごく)　東方(とうはう)万八千世界(せかい)の光(ひかり)

如金色(によこんじき)法花(ほつけ)序品(じよほん)のことあり　法花経(ほけきやう)を説(とき)給はんと

ての瑞相(ずいさう)の中也　佛の白毫(びやくがう)相の光(ひかり)上至有頂(うちやう)下

至阿鼻獄(あびごくに)と云也

一 仏(ほとけ)ぶみ　普賢(ふげん)の粉川(こかは)まで　ほか現(げん)の思ふもあらんべし

ガラス使用

一（哥）くものめぐりハつゞくとやとかくらくらとらんと云心也下の句く
古今の也
一（哥）あとの葉をと川哥　若鷺のとる山の椎柴の葉く
ハもとも君をかこちし　私名雨とハ十くらの玉
とかくかゝるとみるハちやきん秘海鉄
一（哥）たま鉄名のむ哥　ゑれなし
一（哥）らうとおくん　さ衣の雨哥　浅浮木とも也
一あくるん　此詞此物語よあり　さあくんと云心也
さて一段ゆくまり給へしどうく契をも雨く
ゆへかりそまぬうやも也
一うす大口

一さくらがさねかんれうきぎ
一若乃梅せんまう
一（川哥）髪ゆあそ咲かゝるもあれ若花桜よのもとも云
けるに此哥れん鉄継付ゝるゝ波よもそとハ
波うりひさうしあるん心者ども也
一あ鉄角ゝまゝしく　心やまゝしき也
一さうしさそせ
一（哥）やと葉　八百万神　さ衣の哥也
一とのもうちを　秋のをあれもも川名のごとく
母流ゆくおもらしまさんと也　源氏宮の御
哥也

ガラス使用

一（哥）さゝ木蒹かりがね　さ衣の哥也　源氏物語（げんじものがたり）乃面
紙（け）也とよめる枝（えだ）もしわりおれ巻（まき）よあるをおもふへし

一（哥）つらぐ見　御（ぶぎょ）繪（せい）裏也人とハ源氏家也

一（哥）をとろへもち　狼細工（さいく）可隠（に）

一（哥 さ衣）物よみけるとハ　時鳥（ほとゝぎす）忍にまりとハさ衣
り時鳥をとおもはずにへうとゆや

一（哥）かくちう神と雲（き）の絶らんまで然らぬあし
し給へるなり

一よ給げ乃人り　物をおもひ萬人（ばんみん）のおもひ
さら人のさまともせざ菊（きく）人さん君（きみ）つらく
思ふさとなり

一さ衣車（くるま）かくと　さ衣乃泪絶し　車かくとも見ん
ゆかりとも也。されどもちつあまむのゝさ涙（ことゝゑ）也
まびうらむる人ともんあさ結んやまくお
ほしめさし。物とおもひくさをある詞（ことば）うきさ衣
の泪年うけるあるも恨（うらみ）給はすともさむ御人を
おしとみんとこせ給へるし。御門まできさ衣の泪まで
さ給はあさ床あれ（さうし）の絶あり

一見るさびりハ　さ衣哥也　源氏乃宮のるあちむ

一（哥）こゝ和まやハ昨日（きのふ）の泪此哀（あはれ）を無縁（むえん）へとくるれ
給へとぬらしてびまとそて更せ給ひてひむじらへの（おほひろ）（母きさ）
まねへむ也とあまやハおもひらるへき葵植の如

よ紛(まぎ)れたまへれじと也

一法縁(ゑん)たまへるハ　天子(てんし)の法のゑんなるべし

一みかどハ　前斎院の法皇の御あさ衣をしたがへ玉ふそ
あさうしうらんと也　おほきさゐの宮ハちうぐう
でんゆくと云事也　さがのゐんの法会を斎院(さいゐん)方
一条の院よりおもしまはりあるまじとと云事
とも也　斎院笑話(わらひ)への法　法(ほう)あり　おもしまはりとひ
おほさんとたうとのもと云事也

一おもしよ源氏げん　大后とた相の法ありけるをも
一さゞつ条よろこびいひつ　さ衣の法くしん御ゆさる
とハ前(ぜん)の御むまと云也

一みかどハ　前斎院(さきのさいゐん)也　法出離(しゆつり)とも也　前斎院と大后
とた相の法ありけるをも也
一大将の思ひたるも　法おありけるとし　おやまゐらせ玉ふを
人(ひと)あやしく天子(てんし)と云事也

一如の御まつひ　前(まへ)の斎也　（私云大将ノ思ヒハナ年今ハ狭衣ノ我ガ物トハ思ハテ天子ノ御事ヲ叙大事ヲモテナシ何モ如何ト思ヒケ虚心二ケ年ハ勝ヒバ天子法心二入）　後(ご)斎(さい)源よ御ひと源ハ
しと同じなるべし

一あらさしまし　（斎さ衣）源やかゝるを　入道の御まへより御はらへ殿
よもし　源上(そのうへ)ハかゝるとし　いふかん　柳葉(まつさとし)也

一あるとしつらゝ　入道の宮への霊(らう)あるより法ハおへて
一源上のまるおハ　思ひ申とあらぬを　見(まへ)とおもれなる
お斎院ゑ法(ほふ)の御ゆりさるとも也　（ちうのえんのゑん）前斎院斎せんあるまとハ母宮のあたさまある

ガラス使用

一しのぶもぢ　おの哥よりおこる
哥一おくふかくふみしのぶの道をもなほしらせばやおもふに結（むすぶ）
しをあられなばとなり
一女の中将（ちうじやう）　後式部卿（のちのしきぶきやう）の宮（みやの）の姫子に
女中将のいもうとの姫君さ衣乃出仕の時一女（め）
とらせ給へり
一落葉かう　さ衣の君ぞめ給へる衣をひく
人あまたばかりひあはれなくさ中将の妹（いもうと）なる
哥也中将の妹（ちうだう）也
一あはれみる　妹の君なりけむ思ひ初（とめ）けりしきとも也
女の中将哥也

一あさぎぬにて　ふかき色のかはあまたかさねたれども
あだめづらしくてうへにまゐるかみとしも
一いみじき人なり　引哥未勘　男の恋かけたる
の哥也
一すずりにかう　恵（ゑひ）深くて頼遁世（とんせい）のしるべともあるべし
とさ衣の給ふなる也
一きこしめしつれ　姉（いもうと）也
一あるよの松風
哥一まつまつに　さ衣也中将の妹（いもうと）をおもひくせ也
哥一人は思（おもひ）給ひしをまづうちとけるへあるらく
也　寧（ねう）はおぼしめす人を恋しくてや

引哥
一さ絲しられ入野の薄初尾花袖しらしとひく玉鬘
りきん

一さ渡くれ御光の中より清平治絃ちるど行るを

一まくらとともおびくるまゆゑに　捨ぬくや　秋風
吹とハまくへ枕かざ絲さ衣の中を行へきとぞ　哀

中納言哥
一もとあらく、さ衣のもしちらぬハ氣あぶちる向
露もしらじとぞ　同人哥

一名ばかり　秋萩もとあらどる風乃吹ぬれど人の
へだいつとやぞ尊ねる　嫂捜

一竹乃中　竹きられ錦かさ衣八是非も嘆きのんを

引哥
一ふくしにおりひみだるく志の薄　〇世のかまさし八中
納のはさへられるがとや

一中あるにを　竹乃中あら践妹まい清して也
扇ともちらして八千年されどとも也

一ふ　妹と一方よりはまして　ありかたのめず
とぎにつそけるにほどく云也

一法花のまんだら　源氏に法の巻よあり　仏擅
法花経也その荘厳也

一夢のあるべ

哥
一大井川　ゐまたりこく年経ても忘れはなきと也

一及見佛功德　譬諭品也　法天公を供養し

なをく廻向の文也　我所有福業。今世若過世。及見佛功徳盡廻向佛道。

一文も佛の　若宮乃口細也　けさやうの経文をも若宮也

一いけうしハ　若宮の御詞　さなむ経よみて白

一それ是程よハ　かなしともおもひきてあるまじハ　不動尊ありかたきんとも也　入道殿不動へ向ておはしまし御のまへとさ衣の御もりなる也

一御きこの　古物語あるべし

一うけられても　掛狭あるべし

一みつもの　けんぐいうきなまん〳〵る事也

一藤ゐ鹿總　さ衣事也　尼とハそん〳〵めの也

一いかなる人をか　此物語りをかし紀細也

一紬ぬくられと云　古物語ありあるべし

一おつとをきうらめ物語　入道殿の口へ事も

一いりかく　源氏の君へあり

一八千かへりと物語乃　若宮ハ〳〵ゐまとあり　殊ろのゝ　八千へりくゐまハ後悔しさう時ハくゐまハ細の以を後ほしのまゐ紙を悔あてし。立ケイ又立へりひそともあれど若宮もなれ気よし君ハ立ひ死よあらんとあり　さ衣事の之

一後の世れ逢瀬を　後の世れあふき後細のまんと也

ガラス使用

わかるゝ心後をとふぎりなれば也さ衣詞也

一まことまうし心のも　月ごろもさ衣を世すま殿（どの）

ざりあんは遁世（とんせい）乃あらましかくるに月とも

一んそるまかりし　は遁世乃すぢなるべし

一身ざまようこ一の好色（かうしよく）のとみともあらずのさまなど

のことは情（なさけ）あるくあらはさぬゆへ入道あひしとも

わか身も流（ながれ）ゆへそ入道の心乃あり所正しくりて捨（すて）

かれ身をも捨（すて）んとまでは我（わ）ひとつまじきなど

さめども出てゐとことをはべらずて

一此のはんなり　入道の心ゆへ心あくしらしぬと思（おぼ）

ひろうましかれども

一その一ふは　入道殿の母の事也　入道殿は錢さ衣をいふ

一あさんけ乃橋　ちくうひとの也

一忍てあひ出路を絶ちしうとあるをひ　中納言（ちうなごん）

佐（すけ）のもと也

一みちきへ乃寺あくれあるし

一まこと出の露まとの影や世中れとられせんをり

あきしあるらん

一欲境

一又うちそびく　椎乃生すびくと云ハ生お

びさおんぞり周某也　周はするへし　但如何

一みうかん　熱をあつむると云　源氏よあり詞也

一おぼろあり　ゆくれあし　さ衣本ニ文字ハなき也

一あかり　さ衣のうらひ給へる也

一よすがの物をもて　法のみちくまであし

一切かさ衣ハ　法遁世のへるや

一霊鷲嶺ニ御法の花つくしまうとはぢらふ思ひ出そめまふ

うけしせられ

一風の前（まへ）の

一世皆不牢固（せかいふらうこ）　随喜功徳（ずいきくどく）品ニ法花一念信解（いちねんしんげ）

功徳乃格量ニ小乗経常れ法門を説て阿羅（あら）

漢の果證をえさしむるとよめる文也

世皆不牢固（せかいふらうこ）　如水沫泡焔（によすいまつほうゑん）

一大井の物語も出給

一世やはなからん（ちりけさイなし）　引哥　あはれさりし涙の露もちるゆくへハやはきえめかんやさめらん

是（これ）ゆかれバ新古流乃ゆへしまん法ニ入有り

一ありしの御（まき）　新（まへ）ありて

一隠をも世すて給ひ　あおやう流也　源氏文之淺まし八さ衣の好文也

一ひたくゆとに　とある法遁世あるべき也

新　一いそれとも兄の哥　源氏の文也　ほいふしちひるを

ま如をとはましくバ　とハさ衣の歌うとも　あらじ

悦さじ也

（さ衣）一行への歌　あはれ也　是世あり　第八巾宮ニ

あふゑめやさバとハさなさぬ也　世後ひくへとてん

なげきすゞろなり源氏の宮乃御ためにてとまれかくまれ

一あふすまぢぎり　前の事也

一むかしのきん　琴ハ奇特なる也　鬼神動かする

源氏よあり

一法楽荘厳　法楽ハこと〳〵く神仏の御なくさめなん也
連歌管絃舞楽乃類なとをも法楽に披しても也
論義并読経なとハ真実の法楽也

一まうつと　后乃綱也

一大白牛車　法花一佛乗にたとへたり
長者ハ釈迦如来　諸子ハ三乗乃機の舎利
弗等の衆生也　火宅ハ此三界也

一源のこと乃事　かくれなし

狭衣下紐第三終

京乙
16
335

ガラス使用

さころも　四

京乙
16
335八
特別

ガラス使用

大正
9.3.2
購求

ガラス使用

帝国図書館蔵

狭衣下紐第四

一日のうちもと為　緑衣乃禅縁覚想也法道世縁あるへし。さるは光つゝし身ハ御即位あるべきこと也

一浄蔵浄眼乃　妙荘厳王ハ悪王にてまし〱なりし二人の法子と法母の浄徳夫人と　雲雷音宿王花智仏の法をきゝてさとりをひらき父の悪王を仏道引なさんとおもひめぐらして神通種々変化をあらはされど父王大きに歓喜して邪見をひるがへし仏に帰依し猶あらくは聖君と成給ひぬ其時の妙荘厳王ハ今の花徳菩薩也浄法

蜷川式胤蔵書

ガラス使用

丈人もとの仏前光照荘厳菩薩也浄蔵浄眼

はもとの薬王薬上の両菩薩也

一舎利弗劫濁乱時衆生垢重慳貪嫉妬成就諸不

善根故諸仏以方便力於一仏乗分別説三十

方世界は一乗体ハ二乗三乗乃法ハ方便也

一院の御まへ　女院也

寺 一つまがとも入道尼君へのさ衣の法華

一なむしにあらず　是皮引分　御道世尊の三巻ニ説り

新入乃文 一つかぎりんふうくるひ放行へる尼君して八難

をもまれがくかしきむしとあり

一まつれるりきし　引き行へるは智ハ紙を法幾

ぜしやうはさ衣の説也

一まとも　一乗のたきつきを説ひろくおしすきたること也

とは涕泣ありのんぎしある衆おとくおとく成仏す

てともにてまづうしくのりひ説へり

一あしせん　くるめれ法師を阿私仙人は法也り

新さ衣 一あめの法を　法華経をわくん物経とさ衣のおあけしめ給也

一みどりの神人乃祝ハ神のをしへあるれどさ衣

乃法華のは此世の繁花ハおびしめさぬとも

一文はあかし　一乗文也

一さがのわん　恨けさせ給ふ残さ衣の宮へ説ひろく

御まはばよとあり

一かくまでも　さ衣の御ひ逢ひ給へるを驚て也

一さ後くの海ぶし　若宮の事也

一うしろめたしきこゆるかはまねてみくちかんまつる事也

どちかり継給りんまでうしろめしうらんとも

一山の人々　山より海あるも出名あらんとも也　寵詞也

一（引哥）増そえて此板田の橋乃こぼれなましけたよりゆかん

ゆめなたえそね　人丸哥

一行末ハとのゆかしく　若宮乃御事をもおもひゆかりえさせ

ぐして出さまを給へるまゝにおぼしめさんと也

いとゞかう入道の宮乃御心ん給ふ也

一いでやうひあるくまで　好文ハうひあけまでもとあられ

とおぼしめさるゝ也

一いとゞさてみくて　法おほやけハ表朝と號ト定らるゝ

とて御家ある絵る事　入道の宮乃出家になるまでうつしきこえ

一斎院にまゐり　さ衣斎せられ給ふ

一まことや　院の女御　後一条院御位の時　三巻ニ

さ衣の御とりもち出て院へまゐり給ふ嵯峨院の女二宮也

一斎院　源氏の宮也

一かぎりとあれど　斎院にまゐりしまでて　若宮

源氏乃宮りハ別當給ひぬと也

一此女御ハ　院乃女御と　斎院とうちとくしうらく

御中とあり給へり

一（哥）宇治へ　秋風は独吟（どくぎん）之。時よしめハ女は扈つ也
哥を明（あきらか）なり

一 あのゝくぬ　掃（さうき）也

一（哥）掃集（さうきさへ）り　もとハ秋風ゆへくありしまうしん
也秋風にさりしましるとおぼしめさむとぞ也

一 行ありしを　秋風を喪（さうぐう）へとおぼしたるやとぞ也

一 三千（ぜん）大千（だいせん）世界（せかい）一須弥（しゆみ）千と小千（せうせん）世界（せかい）と号（がう）ぞ
小千世界千を中千（ちうせん）世界（せかい）と号（がう）して中千世界を
千ヶ三千大千世界也。三十二相（さう）ハ　佛（ほとけ）の身（み）およ（えんさう）
備（そなふ）る御貌（ぎやう）が三十二ある也

一 式部卿宮（しきぶきやうのみや）が上ハ　中務宮（なかつかさのみや）の妹也（中務宮ハ　さ衣の大将なり）

うちの姫宮すやと云し人也

一 法の□さむる道（だう）ハ　弘法（ぐほう）也　人をもとめさせ給ふ言を
夜あるそへハ人まそえりまほしきざれ源氏の宮へ
の御□神を結（むすび）てもつるまさやうなるへんと
ハ傍の郎（ちう）陽相（まいさう）也

一 さそもいの中よ切りわるまうると　神の治あら給
（哥さ衣）よのをあしハ夜（ゆめ）のまうわんと也

一 まうあしや哥　陽（まむ）夜のる也

一 うなはにあそんやうあさん　盲亀（まうき）の浮木（ふぼく）乃
ごとくなら也

一（哥）とりの人もて抱かとなるや　世中（よのなか）をあるましあかる

の粉笥とかけん　神おろしまゐらせは刀のれ笹の葉にて人
をおろしけるとぞ也
一かうれしや　かのうへ袂ありしや也　抛おもひ
かくぞとハ神おろしくわたるみゆくへ抛おもひ
まゐらするのあたりあかしご神楽（りよ）の御おそれ
かうもぐしてもぐ者く中比くやしくおそい
まはせひ給へるとぞ也
一（寄表）刀のかれりて　神垣ゆく　ひまもとなく恵みしくあらそ
一花櫻（さくら）かうくれおはしまして神のたつさあはあらん
じまも　思ひしくハ神乃いつくもとあるまじしの
かたまへし

一みかみは跡たるものとぞてまつりに御遊あらしかへむと
こともあらまほしきあれ
一あをとあくらく　あくらくは此物語りかきとゞめたり
一太政大臣（だいじやうだいじん）の御子（こ）は此巻（このまきに）大納言　三巻ニハ按察（あぜち）大納言
と見えたり。新中納言（しんちうなごん）南宮也　此巻ニ兼官（けんくわん）
宰相（さいしやう）中将と云し也。後式部卿宮（のちのしきぶきやうのみや）の御子も宰相
相の中将也まぎるべからず　其人ハ太政大臣の御子也
一みかれはそぐくともとめあがれして
度へ給ふからのかならずあら網近年（ここハこんゑん）歟絶えし
ろ絶えさせぬとぞ也
一くれしくらくれぎし　くれしくらる也　源氏ノ夕霧（ぎり）

とまりゐんへとりかはしをまうく也けり

一うちまゐりかへりうちみる　愚按(ぐあん)

一かのさくら絵　源氏(げんじ)物語(がたり)の巻(まき)なるへし

一其のおもむき　今の文を撰(さ)撰(ぐ)りて作よ法蔵(ほうぞう)

也しるすおもむき也

一もしかくし　車をも也　源氏(げんじ)のあり

一有漏(うろ)無漏(むろ)あり　三界(ず)の世俗(ぞく)は有漏(うろ)なり　仏道(ぶつだう)

さとりは無漏(ひろ)也

一寂寞そくふ　三十五八弐部(ちまきゆ)の文乃上(え)なり

一ゆかりもとめんにや（狭衣）　柏木(かしはぎ)の桜　行(ゆき)あかしん也

一さらひまを　草子(さうし)の坊也

一紋ちらしまさり　柏木(かしはぎ)の花乃面影(おもかけ)也

一堀井乃姫君(ひめぎみ)　入道の女ある人をいふ也へりつ

ありし紋所り花く姫君へつかはされしやうちある也

一ちかふこゝろにふ斎（狭衣）　柏木の桜乃んあちなるへし

一中将　此佐妹(いもうと)の姫君八さ衣の佐(すけ)位乃時一家のこと

すへり

一あかつきのもち　無縁(むえん)ぶつに但(たゞ)しかくある事かちあれ人を

涅槃(ねはん)経(きやう)にしてゆるされてあるんみりとた

ちかく都(みやこ)のかれ栖(すみか)のあり中々て嫁(よめ)まて母ふさち

ともかち進めんる

一宮(みや)の前(さき)のゆめを語り　本宮願(ほんくわんぐわん)（一本云）　無縁へのなりちかるひちかるんゆ

給へるはあはれなり。道芝（みちしば）の露（つゆ）と云事あまた（まく）

あるを　一品宮へ狭衣のとを後ちあるなり

哥
一ちご花なり　姫君の代りに母あるべし

二ゆきゆきとは（ひと）　一行（ひとゆき）もえんぬ　母上をさ衣はゝ宮まゐる

まうけんまうしや

一右のおとゞ（みぎ）　宣耀殿と系図（けいづ）あり

哥
一のとうゆきも母のまゝ　親王（ひ）んゆくべくもあられ花月数

こうやし

哥
一いりまでやまぬ　さ衣の哥也。理（ことわり）あるぬ残白

をさなべし　理を庶幾（そくぞ）あらくあぐさあげく

いこそと思ふ（ふ）んあるべし

一ちかやとぶらんの橋ハ奥州（あうしう）也　そあるらんハ及ばぬ

中なからんまで逢（あふ）ふやしさ衣ハ姫君の君ふるまふあらり

しうと紫（むらさき）ハ自筆（じひつ）あそべあまりしとあり（まき）

一うちまくぶそし　源氏もとも丸の巻にあり。くぶ

さとそ　細工（さいく）ものや（やのまつ）の（すゑ）狭に（くらぶ）ふくたき

あらまからは鎌　そら（は）。あざうしくとりては法縁（えん）あ

まくとかのあるべし

哥
一名あさし哥　桜大納言（だいなごん）よめる太宮にて春ぎ（き）に奴給へり（え）

一あらひ　わが心（こひ）のそめなけハおぼく（ま）もみつ（めう）しと也

一流（なが）れ（それ）ぐみも涙　見るる人ハおくしじと也　一品宮へ哥合（やく）めり

哥（さ衣）
一さるとある見之も　後理（うしろ）哥やの理あふあるべし　國来勤

一堀川大臣（ほりかはのおとゞ）ハ狭衣の父 母式部卿の宮の娘（むすめ） 狭衣の母大宮也（嵯峨院御弟也 はもしらぬ也 堀川殿事也）

寄 一ゆくへ也よ浅ましく これあはれ 狭衣の事也

一其の年 狭衣への御思ひしられぬべく也

一さしもあらぬハ 狭衣はあり

寄 一あさ露や 法（ごぜんおんなき）御事也 狭衣を 中宮への 申すべし

一峯（みね）の秋の 御ねがひハ 狭衣の 御ちぎり也

寄 一やしろの神（まい）ハ 狭衣へハ よばれ まいりて 御法（のり）

寄 一ゆかりやもしの 御事と 思ひ さ衣乃 物思ひ 行へ也

一さやかの御ゆらひハ あらはれまじく 中宮の御事なり

どく物の御ゆくへハ 浦くのうへしさ衣にはあらで まことさへ すむと也

一かくや姫（かぐや）の事ハ あはれに たえへうらんと也

一左近（くんだいが）郷ハ 思ひしる ことのあらなれ やむ事なく とも 物しらん

此大将ハ 狭衣也 よろこんと あはれ 物思ふ事也 一品宮は 産（うぶ）屋あそばし也 一品宮ハ 一条

寄 一院の御姫宮也 狭衣乃 北の方（きたのかた）

寄 一ゆくへ（さうし）乃御ひ寄 一品宮（いちぼん）のへと 御心がへりて わするゝと也

寄 一秋のことぞ 狭衣は 御心（みこゝろ）もあまりの事也

一うきの涙（なみだ）と 狭衣は 涙（くもり）あまりなんの句 そむかんと思ひく

一てかくとめる 浦（うらなぎ） ゆくへ 思ひ 世中（よのなか）とも

引寄 一涙の 吹きびの中山 物びれる 細谷川（ほそたにがは）乃 音の

ガラス使用

さやけきさ

一（引歌）八重葎（やへむぐら）しげれる宿（やど）のさびしきに人こそ見えね
秋はきにけり

一年のやうなと　（引）むらさきのひともとゆゑにむさしのゝ
年比まではみな一枝のことく

一思ひたる年のはかりいかゞとおもふて
といひかけたるとも

一十市（とをち）のさと　あまりあり

一我も又　さ衣（引）　十市（とをち）の里也　狭衣ハ是にて

下思はおぬともとあるは古哥をうけたりひ
しれんもの也　思ハ一筋にはあらぬ　姫君の御返（かへりごと）母も

ほのかに見えしゆへなる也

（引歌）狭衣ある（は）かゝらん人からまとも秋を益田（ますだ）
のいけるうひ　おくまとこの哥かくや也

一恋ぬべくもおもほえ　たゞぬべきは洛命ゆゑなる文姫
君とあけ暮まつとも中々おもへんふきや也

一南得水

一世のたる姫君

一歌代人歌　源氏宇治巻（うぢのまき）にあり

一源氏みびの哥　定みのまにたゝん也

一あふせの御　飛鳥川のふかまんべし

一さけて狭衣もし　定めなき也　行かはうち

丸ねをあらそふめともきこし侍る思ふその独吟

を乳母乃独さくハいつぞや此母上へ申されたし

一若紫とハ名とれたる也一夜ぶりも其かどとぞりきかんしやうを

一くちもや源氏の絹しさわとくらんや名残を

こそ古居をとふくむともあはれきくあらんや

一葛のうら寄　くれあり　狭衣寄也

一面影しき衣久遠あり　もけて結ぬとハ実ありあるとも也

一月の出ひのの花乃枝さし　引寄　東結はるきんを

まさかれ袖おもひのとあすりらく

一あさえもをきぬ寄　実ありあんあるべし

一ようの衣　引寄　しとやあて忘しさ時はむすぶ

の衣乃袖をかへしてそめる

一乗しらは狭衣をもとにして思ひかへしハつらんを

一あおくちはせ婚君也　きららくしかうろハ寄相

中将也

一うらみける寄　乗くれあるし

一十体　十斎　星本

一草露　蓮葉　あを涙さ

一思ひ雅不絶

一夢さしあ　見るにそうハあす如法ひし時よ

のを見るもるとやんもりしり

一中将ハ大納言殿へ通路すまは懐姫よあるや見ん路

へり　按察使大納言のむすめまゐり給ふ

一（作者）あとはかなき　年ははかなくしもあらぬなり

一めでたかりし　源氏乃宮の事也

一おとゞ　殿の字めの事也

一宰相のゆるさぬ中は　いかでか肉おもしろかんとと

一うちとけ（引歌）烏羽玉の夜乃夢をも見るべし

あくまでおびしきをりの事

一（本歌　さ衣）ころもとびし　さしぬきの色の絹の袖

絶えやせんとや

一（引歌）いはで宿梅をみて折べき宿の梅の伺ひ也

一（引歌　古今）窓の梅の花の香に咲ける也さぞある梅とぞ

ひそかに知らまし

一ほどゝく　おもんばかりども　姫君の母上へんもつらし

さらに思ひはかり姫君にもやうなりと思ひしめ給

ことにや

一（新）行きかふの　ころもに　色も見えずうつる也

一（新）たかねの　ふる山　さるをなほなどかく　ならぬ寄やう

御母のごとくまもりてこの許乃人也

一未然にして　徒りおもふとて思ふなるべし

一いりと入

（引歌）つかれたる慈の山路の事なれど入とりもたへまゝ

ごかくん

一うきもん　浮紋
一かりまゆを　絵のくりまゆばめるんまゐるべし
一いけるかひあるは　そむじよりも見てくる擬也
さ衣へさしむくる光のこと也
一ちんかう　毛代を用ゐしてと也
一夜のはぎし袁　あきさ洞とはんまく見し毛（だいき）
一んやまく　踏歌。宰相踏歌のことを尽して荒た
あまりよみまてくを花ぐくさにと也。うべちんふく
名を切てや
一見渡くちしさふ　一条へ行てハいづくよ海き
て姫君はみまくほしきふ也　本意引やう

奇妙也
いそぐゆきてハかへるさのゆくへもしらぬさに
いまだおもハれけり、
一十五日粥　粥乃杖かくし打たまへて」勤禁中
ども粥杖をして女房をうちそば男子をまうくるとぞ
うけし　雑談おかしきハことゞくしきことをあらはし本文ハ
不知也
一得名う　くれなし　さ衣
一おほみや　大臣の娘さ衣の妹君也　春宮
ハふかきさき也　さ衣ハ思ひ捨てもあるべし
一宵あめりを　春宮よりの哥よみて也

一さらにとても　さ衣おもふ心ハ又外人への心ばへともあら
ぬとや
一あまぐもる山　あまぐもるとや
一ちりもしらん寺　知らくれなし
一かんのきみかへり　飛鳥井乃母の姫君也
一おりゐのみかどの姫君めでたき人をも見ぐるしき飛鳥
斎院のかみ給ひてびんぐし宮の御事をかけふ一条
院乃一品宮をも女御とし宮の御事をおもく思しめしとや
大かたの御ためとし御はからひへとあり
一ふみも　若宮をも御まへまでよろこびのゆかりやも
さ衣の御也

一あかつきとほまでへきこえしまでぞさもとらぬ紙ち又あや
くるしとや
一たびさへハみやのゆくをもかずさ海で袖ぬらす也
ちぎさは紀列也
一さ候ことのあらじを　さもいへたにもなし
一はかの院乃御時　あはれゆくへもちらさし紅へり
一ひとあまりとの　兄の袖あらそひの引寄にあ
たり　引寄　袖ぬるまでおまよひの涙をくる海の
みな紙あふくやはんさやもふら
一耳と海しを伝へゆくまで　さらしの地ちあり　わが
みはさ衣也

一等覚　菩薩の極位也十住十行十廻向十地等覚妙覚　是を別教の四十二位といふ也
妙覚ハ仏也

一水の白波たつなれ玉つ海　跡とゝめけんなるへし

哥
一ぜんげりあそん哥　さ衣之事也又古今の哥をも如く
源氏宇治巻ニ在

哥
まつるし

一月そゞろにもと　源氏文の古哥也

一荊はもし　おにあり

引哥
一總角の後ちうし車ふ七車　はまてつゝく
あふつゝくハ七車ひ哥ゆくたまるへし　我是

引哥
一宿りゝく袖ふりとけれ如あれハつまらぬ所のおもひ
くもおろす歟

一とふかたもなき　由へ姫君を送りまいてさるを語る
もと今上おかれたり思召也

一人をもゆるさるゝ　姫君のうへ付給ふる事也

一かゝのあめく　源氏乃文の古哥也　おもはなり

哥
一ぢくてるく　狭衣乃うはする也へし

哥
一殺る木の　狭衣の袖あまりてハ也

一えんし楼乃　燕子楼中霜月夜秋来只為一人長　白居易

一早く深くた　ちまちひまち侍れはゝへかみとも也　又戯

一ふかくそれかと　源氏文也よく似るとし

恋 一来ぬまひん恋　くれなゐ　さ衣

恋 一名残をしみ　人をまてしなれどおもひと云名(なな)も
をしみとやしよかくる紐(かど)乃契(ちぎり)ハたえてゆくとの
はれまり　さ衣恋也

一かん　堀川院(ほりかハのゐん)也

恋 一扇(あふぎ)でふ　名残をしみとて　かりのおもひとハおもふぐは
らうらんかな也　又かくもしおもひあらバうらんさ也

恋 一ひ(ひき)つれて恋　かくまほしく　今上(えんぎやう)

恋 一うちかし　今上　さとも衣(あかり)　もは見え(これ)い也　又かのをも○そも也

恋 一もてとりそもおもひぬ恋　来くれなし　浪(なごり)もあがる

一恋をしのびたへハ如何(いかゞ)　若菜

一恋にのらへと物をと　きにはしきんでとおもふ人あるべきさしも
一恋とおもふぞや　引哥(ひきうた)めいく(いうぐ)の上又今上の哥にてハまちさえ
ふものとおもひぬをとら趣しるとも

一一蓮(いちれん)托(たく)生(しやう)　夫婦(ふうふ)往生(わうじやう)同蓮(おなじはちす)にむまるゝとかや
源氏よかりし

一かよちやう　加輿丁(かよちやう)・川がむれりしまと誹(ざ)めぐ
恋 やもはんあると

一出ても恋　くまなかりし　今上

一あやめぐさなるは　安流よあかきを経へる根(のう)もん紙
うら(くらゐ)みを神のはためにはあかたる紙とかめ給
ひで位よさん付(つけ)給へるとも也　人形(ひとかた)めしとかんがへ

さやか也　此二　故院の人形にあるべしれ二一方一
一八隅も河斎　くまなし　今上
一神垣の杉　同前
一此世ゐはさゝや　前巻に出給へる時乃夢中
の斎也
一みそきまいり　一条院の二条にあるもそ也
一宮今上の儲君にて八隅　嵯峨院御子　兵部卿とや
なりしも御元服の後をもとあらはされしな
るべし
一年ごろの河斎　くれなゐし　今上
一つゝしみ　今上の残ちかゝる人ぞ我ましことに招志せて

一さくけり中宮乃御斎　今上の入道宮へ法施申さ
まくらめし　引斎　つめし色の野中れ清水ぬるくされ
ともこの世の人数まる人ぞらむ
一しと定り　えぞまうさんともまいらめはこよ二
らへ別一　今上
一あるべかりしの　あさましげなるにてすゑをしまうべし
一佛をも志らぬ者もせり　止ゝ不須説　方便品
一佛乗乃法門を舎利弗の請し申されける
り紙のさうしとありけん紙に御絹也
一桐壺　今上の一宮なるべし
一二宮　承香殿乃女御の御娘也

一故宮　後一条院の御いもうと也　此宮命婦かくて

名残り也　若君なりと今上して宣旨也

一いとしを　寂　さびしきを　此代のさひしさにてハあらぬ

しかる也

一行衛をもしらぬまでもあるく御かたりはゞかりしを

し　三川守はまゝどもは乳母不便に思召をし

三川守

一かへりまうし　新　又大弐に嫁して下りし時乃事也

新

一人まかせ　一条院乃はらからの事なりしよ母よ

縁なる也

一さくのよわ気　若乃若気色　勝気色

新

一よろづなりしハ　心憂也

新

一行末　同

新

一とられじ　同

新　今上

一わすれぬを　かまへめでゝ也　中将の御心をおぼしく

新

思ふはさ衣の御事也　御遁世乃心をおぼし八おぼす

おもうまゝめ代の事にて御心にて見そうとくま

てくゆるまで也

新

一あちらの河源ハ波也るを汲みて人ハ得らぬ世也

とゞも也

新　今上

一あまよりけ形さへあれたるなどあさましきなる也

一うちまどろむけハうつしよ時も穀飯だちうちとり

をらひつは精進してゆへは出隠れもまうりぬ也

京乙
16
335
特別

源氏より朱雀院(しゆじやくゐん)の御葬送(ごさうそう)に。いとおほのたちまち三衣(え)の法けさ(袈裟)をちん人(さゝき)持(むく)をしくるし也
一 浅(こゝろ)まそてかきれ　心得也(あやまり)　仝上
一 あやちろくり　同
此物語(ぶがたり)のまとても源氏葵(あふひ)浮橋(うきはし)乃面影(おもかげ)也
少年(せうねん)と書(かき)そめて法おほくかはれどもぜんさの一冊(まう)を全部(ぜんぶ)をとんあるべしあるべく後世(こうせい)の人あるさるへし

天正十九年三月九日

臨江斎
法眼紹巴

狭衣下紐第四終

京乙
特別
16
335

大正
9.3.8
購求

ガラス使用

帝國圖書館藏

狭衣系図

一条院　御母后

おりゐさせ給ふよし一巻に見えたり
かくれさせ給ふよし二巻に見えたり

後一条院　御母女院ハ大政大臣女

一巻より東宮にて世給ひて二巻に位につき給ふ
四巻におりゐさせ給ひて又一条院乃御子にまし
ます也

姫宮　御母弘徽殿后嵯峨院女

一品宮　御母同

嵯峨院皇太后宮うせ給ひて斎院（説ともあり）おりゐさせ

6

藏書
国立国会図書館　タイトル『狭衣』　請求記号　京乙-335
ガラス使用

給ふ時賀茂よりみ給ひて女院の御ゆ一
条院（二巻ま）にくまし給ひて後（のち）一品（ぽん）し給ひて（三巻まて）さ衣
乃大将の北方よなりまし給ひけり三巻よかんえ
らり四巻ありくれさせ給ふ

私母女院の御もとなる一条院よ位のゝち三巻に父帝（ちゝみかど）
乃そらわに法師せんとて若蕪（ひつぎ）よ立ならひして
女院とともにおはしませ給ふとあり三巻嫁娶（かゞみ）
の時三十歳（さい）也さ衣は九ありし四巻は尼（あま）にあり
てやがてくれ給へり

嵯峨（さがの）院　御母同

一巻よりまし法位し時天稚御子（あめわかみこ）よあまくだり二巻（詮世北年）ゝり

ありあさせ給ひはぐくみおはしまして嵯峨（さが）は位給ふ

春宮（とうぐう）　御母中宮（ちうぐう）　堀川大臣女（ほりかはのおとゞのむすめ）

一巻よ一宮（いちのみや）にてかへしより二巻にまゐらせり立給ふ

若宮（わかみや）　御母皇太后宮（くわうたいこうぐう）先帝（せんだい）の法いおうと

二巻よ生（むまれ）給ふ七日といふよ母宮（はゝみや）ありをらせ給
ふ嵯峨（さがの）院ふくみひ給ふ時さ衣大将よあづけ給ふ
内々と八大将の法子女二宮（の）乃法服さゞのみん乃法孫（まご）
なり三巻てり法ある海ささせ給ふ四巻よ法元服（八才の時元服）（げんぶく）
兵部卿（ごさうのみや）宮と申

私
三巻よ一条（の）宮に居給ふとあり四巻に法元服（げんぶく）の
時よ今上一宮（こんじやういちのみや）とありわれより又一条院の当々宮

とあり内にてハ桐壺ニおハしまさせ給ふ

女院　御母同

女院ハ志給ひて二巻に后母宮乃御服(ぶく)により
抑まさせ給ひて一条の宮に住(すま)ひ給ふ大将乃御沙(さ)
汰(た)にて後(ご)一条院位の時三巻に内へまいりて
弘徽殿(こきでん)と申す也四巻ニ姫宮をうみ后(きさき)に
たち給ふ

入道宮(にうだう)　御母同

私
一巻に女二宮(をんなにのみや)とあり三巻の末(すゑ)に（一品宮と同かくおう）二十一歳の
時入内(じゆだい)ありて四巻に院の女御(にようご)とあり

一女二宮ハ帝(みかど)とりまるらしく志給ふ天(あめ)乃下(した)治め(二)
ゆづり給ひし五月五日の夜大将乃笛乃禄(ろく)
給はせんと嵯峨院の給ふ大将源氏(げんじ)の宮の法くす
おぼしみだれてんかうもしつまし給ハざる中に弘徽殿(こきでん)の
くひなくの夜まぎれまいりて大将あひ(まあ)まゐりてまうとの
を生(うミ)給ふ母后(はゝきさき)わがおほ御ありて奏(そう)し給ひし
よおぼしちぎりましたりひまでつるに后(きさき)七月と
りかくれさせ給へる疑なしにおぼしてたる病(やまひ)
りことづけて出家しおはし給ふ

私
嵯峨(さが)院のうちに住みと三巻にあり能書(のうじよ)の
よし四巻にあり

女宮　御母同

二巻には（後一条院に申し）斎宮に立り三巻に伊勢へ下給ひし女三宮と申けるも入道宮とはこれよりいへるならん（二巻ニあり）

堀川の大臣（ほりかはのおとゞ）

御母同后腹（おなじきさいばら）と一巻にみへたり

一条院嵯峨院（さがのゐん）のひとつ后腹（きさいばら）也たゞ人（うど）にてくらゐをはなれまつり給ふ狭衣大将（さごろものたいしやう）の父也

私六十四代円融院（ゑんゆうゐん）は二の御子に比まで一巻に関白（くわんばく）とあれど二条堀川（ほりかは）と四巻にあり又是は門にあまり堀川の院と号（がう）まで

今上

御母先帝の妹（いもと）の女宮

今上とは狭衣の大将のはじめ一巻には二位の中将同九月に中納言（ちうなごん）二巻に正月に大納言にて左大将なり給ふ一巻は五月五日笛（ふえ）ふき給ひしは天稚御子（あめわかみこ）あまくだり給ふ其夜帝（みかど）女二宮を給はせんとの給ひしかど後は一条院乃一品の宮を三巻に給り給ふ御心ざし浅（あさ）くして歎（なげ）き給ふ二巻には高野（かうや）にて普賢菩薩（ふげんぼさち）あらはれ給ふ三巻に賀茂（かも）にて琴（こと）引給ひしを賀茂大明神（だいみやうじん）大に感（かん）し給ふ四巻には夢（ゆめ）の告（つげ）どもありて位（くらゐ）につき給ふなり

私神代巻下（じんだいのまきのげ）に初は天国玉（あまつくにだま）乃子天稚彦（あめわかひこ）の喪（も）乃ありて一巻に源中将（げんちうじやう）とあり又十八歳（さい）とあり四巻には賀茂（かも）の神又天照大神（てんせうだいじん）の告（つげ）ありて即位（そくゐ）し

一宮（いちのみや）

御母中宮（ちうぐう）又は大臣（おとゞ）の女（むすめ）

四巻にむまれ給ふ今上乃一宮といへり

私　男御子二歳（四歳）の十月袴着し

一品宮　御母ハ飛鳥井乃帥平中納言女

一巻に胎の内七月にてつくしへ下る道にて母君身をなげ給ひてはおぢの禅師のもとにて常磐といふ所にてむまれ給ふ百日なりて一條院乃一品の宮の御子として姫君とそしつゞき給ふ三巻より袴着太政大臣まいり給ふ四巻より一品宮と見えたり

私　七歳の時袴着あてゆひ大臣と一本にはあり

四巻　弘徽殿なり給ふ又二宮と申す女

の次あられきこえしは喪義あり

中宮　御母ハ式部卿宮御女坊門上

はゞのみんは位の時参り給ひて一の宮うみ給ふはきえいとめでたし四巻より皇后宮とあり式部卿の姫君への文より下枝乃昇あり

今姫君　母ハ一条院の后の女童八条中納言のいもうと（飛鳥井姫君の又）（北条時し）

一巻に東院上むかへとり給ひてうしづめ給ふ法子とおのゝ出さるゝなるへしおぼとゞれんぞう入給ふ東院上後一条院は位の時三巻によまいりせん（今姫君は八女四君と）せし給ひつり太政大臣のはゝ宰相中将をひよ申さてつかうまつりて嘉宮道をとうみ給へるよし

四巻ニ見えたり〇おもとなくて母代（もくだい）ありけるが給ひしゆへ吉野川（二巻にあり）なにかはわたるなとよみ給ひし人

私母代（ははしろ）ハ西国（さいこく）の受領（ずりやう）と四巻ニあり

先帝（せんだい）

式部卿宮（しきぶきやうのみや）

これ給へるよし一巻ニ見えたり

後（のちの）式部卿宮

これ給へるよし是も一まきに見えたり

宰相中将（さいしやうのちうじやう）

一巻ニ宮（みや）の少将とあり四巻ニハ宰相と見えたり

〇二巻ニハさ衣とも文（ふみ）やへまいらせ給ひし人その折ハ三位中将（さんみのちうじやう）と侍り

私此圏外（けんぐわい）此説（せつ）ハ誤（あやまり）さ衣とも文へまいらせ給ひしハ中務宮（なかつかさのみや）の三位中将の時なり

男子

私云一巻ニ今姫君のせうとゝあり

今姫君とひとつ腹（ちう）（一巻にあり）の中将ニ[illegible]と侍り

私

母宰相中将の北の方宰相の妹へ如（ごとく）一巻ニハ式部卿宮姫君にあさかりしさま

姫君

藤壺后（ふぢつぼのきさき）也さ衣在位の時一宮とも言給ふ

私

四巻ニ宮の女御とあり一宮とも言時ニ立后（りつこう）し

坊門上

堀川の大臣の北方にあらそて中宮をうミ給ひ（嵯峨院后也）

てハやく花やかりおハやおもしろくおハ

したまふ

源氏宮　御母ハ中納言流

御来ハむまれ給ひてやがて父帝にをくれ給ふ（一巻三葉時）

母御息所もうちつゞきうせ給ひて堀川大臣上の

故宮ハはゝおもふてかゝせしかなみめしてむ

くへとりてかしづき給ひしを狭衣大将おもひか

くかうすも給ひしかなりおもしろく人とい

みづからにあひ給ひ果ては斎院ゐ給ひく大お

臣上ハ春宮まいりせんとうしづき給ひ（後嵯峨院）

を嵯峨乃斎院にたてまつらせ給ふべきよしありしを（二巻末ニ斎院記）

て三巻ニ斎院ニ立給ふ

私　一巻ニ十五葉とあり二巻ニ常のみかと太后

宮の眼ニ給ふとあり四巻ニ後にとあり又

入道の宮のほどとを給ふ法あり四巻とあり

堀川大臣上

四巻中宮太后宮と申せん帝の法妹伊勢斎宮

也ておそせしをおもとく下位乃法嫁給ひ給ふ

狭衣の大将の法母也

私　一巻ニ大宮とあり

嵯峨院皇太后宮（さがのゐんのくわうたいこうぐう）

皇太后宮失させ給ひて（二巻にこれ）源氏の宮も出し給ふ服（ぶく）

是狭衣いうとあり 先帝の后いもうとにやあ

女院の御母后也（嵯峨院の皇女）

私二 二巻に四十六歳なれども見えは三十ばかりとあり

又同巻に大宮と書より弘徽殿（こうきでん）に住給ふ也

中務宮（ちうづかさのみや）

少将

天稚御子（あめわかみこ）にあひ給ひし五月の夜笙（さう）吹し弟也

一人

私 二巻の末に中務宮の少将といひしハ今三

位（み）の中将といひしもあり 此君にて 狭衣の大将と

宰相へまいり給ひし（十一月十余日也）

姫君（女）

弘徽殿（こうきでん）にて（皇太后宮也）大将（二巻）にちかうて此君人々姫宮の（女二也）

御覧して天稚御子（あめわかみこ）のあらはれし夜縁によりたまひ

しといひしハ此姫君そうちをも見や大殿

の具（ぐ）にてあらんずといひし人を

式部卿宮上

狭衣（さ）の大将のまかんの女姫君にやといひし人（四巻）

さ衣ゆかりむらさきの花の折ふしの給ひし人（狭衣わかれし子の詞也 四巻）

私 四巻にはなにこれ能書（のうじよ）とあり

横川僧都

女二の宮の御ぐしおろし給ふ人、后宮の御おぢ
なるべし

皇太后宮御母

太政大臣

後一條院の御祖父世にしりおもくせし人三巻ニ
今姫君の御裳着には腰ゆひし人

一條院女御

もとハ皇太后宮と申此三巻ニ尼になり給ひて
女院と申也後一條院二の宮などの御母也

私ニ三巻ニ一条后とありすこし後に四巻にかくれ給

東院上

堀川大臣の北の方也今姫君を養ひて後一条院へ（三巻）
まいらせんとせし人は[illegible]

右大臣

一巻ニ権中納言五月五日天稚御子の下り給ひし
時琵琶ひきし人三巻ニ権大納言と見、
一品宮を心かけて中納言の君にかたらひしかり
一品宮のぬれぎぬいひ出し給ひし人
○四巻ニ一の大納言とあり宰相大夫あり
私云圏外乃説ハ誤也一大納言も皇后宮の大夫を右大

院の舎弟（しやてい）なるよし四巻ハ大納言ハ斎院（さいゐん）の別当（べつたう）と
あり同巻にて右大臣ハなり又関白（くわんぱく）になり給ふ

大納言

一巻ハ左兵衛督（ゑのかみ）天稚御子（あめわかみこ）ハ此夜箏琴（さうのこと）ひきさ
し人三巻に宰相（さいしやう）中将にて今姫君ハまよひ入
しん

（私云）三巻ハ権（ごん）大納言とあり四巻に新中納言（しんちうなごんの）中
将とよめしも今ハ宰相中将とぞいふ又同巻此末
ハ今姫君のよすがとなり給ひし宰相中将ハ
此法一（いち）乃大納言にて甚大変うけ給ふとと

少将（せうしやう） 母ハ今姫君

三巻ハ賀茂（かも）のはふりひよ色よりし人なるらむが
うしきやしとあり

姫君 母同

四巻ハ母上兵部卿（ひやうぶきやう）宮（のみや）にまかりてせんとの給ひ
しかとし

左大将（さう）

宰相（さいしやう）中将（一巻ニ）

宣耀殿女御（せんようでんのにようご）

天稚御子の夜和琴（わごん）引し人

後（ご）一条院春宮（とうぐう）の御時に中まゐり給ふなるらい
とめでたし狭衣（さ）一巻五月思ひて迷（まよ）ひ給ふ人也（一巻）
あやめの中にみ給ひし人也

私云　三巻ノ三十　宰相とし

一巻にあり

右大臣（みぎのおとゞの）

此娘（むすめ）を後一条の院在位乃時まいらせんとありし人也

姫君

堀川（ほりかは）（一巻）の大臣（おとゞ）鼻（まゝ）宮（たう）うくんせの結めし人　又権（ごん）中納言（大殿太政大臣息）男にて氣（け）のやうにせさせといひし人（一巻）

私　一巻に春宮（とう）へまいらせんと父乃おもひし也

致仕（ちじ）の大納言

姫君

此ひめ君斎院（さいゐん）ノ御なる人と四巻にあり　斎（さい）院とハ源（げん）氏（じ）の宮也

帥（そち）の平（へい）中（ぢう）納言　九州にてうせ給へるよし（二巻）見ゆ

山外

これ月毎ある家人二巻の末に狭衣（さごろも）あるへ人まいりてめし出てうちうその飛鳥井（あすか）のゆく末をもひ給ふ人常磐（ときは）にて佛（ぶつ）になりし

飛鳥井（あすか）の君

一巻に太秦（うづまさ）にて威（い）儀（ぎ）師（仁和寺人）ありさしまんとせしを狭衣行あひ給ひて（ゆきあひし時に二条大宮にて）とりとめて法ぞし後（あき）つくしへうじひ給ひしに入ぬべきあたりて七月（ふづき）計

に乳母がかくしひめてさ衣の大弐乳母乃子
式部大輔九州へ下るにさそはせけるをとらしと
おもひて唐泊にて身をなげしに長門守これ
をたすけあひて常盤にて一人女出生せり
て後尼になりてかくれ給ふ

常盤尼君

もとハ一条院の女院に中納言とてさぶらふ女長　三巻
門守にめしそへてはらからなり飛鳥井の君
至りなし人三巻に見えたり

小宰相君

一条院の女院にさぶらふ女さ衣大将時〻物の給ひし
人長門守の子ハあかしにて三巻に見えたり
私　四巻末に申ねとあり

筑前守北方

これハ長門守が娘なるべし

今姫君の母

一条院に童にて仕し堀川大臣物乃給ひし
ゆへ今姫君誕生ありしかなん又おのこ子ひと
りうまれ父乃申ねの子と名のりしせ（式部卿宮の法師宰相中将と）

別当

一巻に右近の将監と云三巻に左近の将監とて飛
鳥井の姫君にゆかりありと語らひし人

少将

（一巻）さ衣飛鳥井に通ひし時ためのりをかたらひし人

私 一巻ニ蔵人少将とあり

大貳乳母

さ衣大将乃御めのとなり

私二 一巻ニ大貳の少弐とあり四巻ニ大貳三位と

あり初ハ三川守也後ニ又大貳也二度大貳になる

肥前守

式部大輔道成 飛鳥井とらへし人 （一巻）三巻ニのぶ

是そ扇乃風吹つたふ

私 一巻ニ大弐とあり二巻の終ニ肥前守

が息也とあり又蔵人ありちかなる事とあり三

巻ニ三川守とあり

道季 さ衣御方ちかくめしつかふ

私 二巻の初ニ三郎とあり又御方みそかにすけニ

て思ひの御ありきにハをちかれしとあり

常陸守少弐

中納言内侍佐 嵯峨院乃皇太后宮ニさぶらふ女 （二巻）

二宮の御事ニ大将殿よりかうちそへして大貳の乳

母ともとりもちしめしける人

私 内侍佐乃三字ハ只すけとばかりむきの宮なる后

ゑりきやうの中納言のむすめ　また内侍のすけ
また中納言の内侍ともいふなり

内侍乳母（ないしのめのと）
一乃巻に一品宮の乳母さ衣のため
ごくの秋風おこりて下（しも）へおちし人

中納言君（のきみ）
さ衣の立ところの我（三巻）権（ごん）大納言（大殿北方）になられ
て後（のち）は狭衣（さ）の乳母の内侍になりし人
出雲（いづも）の乳母（めのと）と大和（やまとの）の乳母と入道（にふだう）宮の乳母あり
入道宮の母でおもひもおもひしものさびて申しをみつき給
ひそて母宮は乳母さきめ出て（二巻）そへ給ひし人
少将内侍（めうぶ）　女二の宮のちゝかさんとあ申しける

行啓参せし人　二巻に見えたり
大納言の乳母　源氏の宮の乳母　室（むろ）の八嶋（やしま）を中とよめり
これは前（おまへ）の人なりとてまゐりし人なり
三巻に狭衣（さ）乃弁見えんとたのめし人
宰相　宮の輔（あさ）　源氏の宮へ参（まう）る宮よりもはなれてま
いりし人　二巻に見えたり
木幡（こはた）の僧都（そうづ）　堀川（ほりかは）殿の持僧（ぢそう）　天若御子（あめわかみこ）の
秘法加持（かぢ）やせし人
伊予守（いよのかみ）　天若（あめわか）御子の事に（一巻）堀川殿見えて太宰（だざい）まで
せし人
中納言　一巻に狭衣（さ）よりこがれし花ちらしける

あらせて源氏の宮へまいり給ひてのちに女房となる

花ちるまてとありし時はおりさふらひし人

中将　同時宮へ参りし人也

弁の命婦　一巻に見ゆ兄の代の源　堀川の大殿　狭衣

に蔵人内侍せうと入道の宮の御方に給ひし人

私　一巻に弁の内侍とあり

宰相　中務宮の姫君の乳母　一巻にあやめ宮の

よみて狭衣にまいりし人　二巻のうちに大弐

ちかつきし給ひしを

私　此乳母が子に小宰相といふ人二巻にあり

中務君　さ衣の母宮の女房也　みちのくにてある

さふらひし人

少将の命婦　一品宮の女房はやくより狭衣の

文とりつぎし人

中将の君　三巻に弘徽殿のうへ中納言の歌と三条の

院へまいりし人

中納言の典侍　源氏の宮の女房さ衣へ琴をとりつぎ

し人

長門守　あやめ君の乳母の女

中務宮の少将殿は乳母也

私　一巻に女房たちより狭衣に寄りみけるより

まで女房のあつまりしは長門守と大納言殿の女房

舞しと二巻にあり長門守が娘也
大納言　又節舞し人二巻に見えたり
[illegible]　おほそう井乳母が男
[illegible]　飛鳥井君の女房
大輔　おほそう井の女房
かくれみのさし　飛鳥井をとりし法師也
飛鳥井の乳母のをとこ也
左衛門権佐　さ衣の君と一品宮の父乃女にて
し人三巻にあり
中将君（飛鳥井腹也）　一品宮の御乳母のむすめ（三巻大和守也）みさきと
がめて姫君のうちへまいりせし人

前斎院の宣旨　斎院にて猫のつくへ狭衣より
せし人三巻にあり
女別当せんじ　源氏の宮乃女房三巻にあり
宰相乳母　為家の北乳母にて供養乃日見え
いふ義なある人三巻にあり
山僧都　おほふかうしの僧都とあり三巻に大将
世後のとらんとせひ宮に御ひし法螢兵部卿
えん流のり御のまへ給へと大将への給ひし人也（大将の母上へ）
りありけれ成なるべし
蔵人　四巻にあり　螢兵乃宮より帝より斎院へ
まいりし人

まくりの侍従（つゞみ）　無系ばつき四巻にあり

堀川院（ほり）の別当（べたう）　むかし加階（かい）まうし　おなじ家の北

の方むすめの時かくしたり四巻にあり

辯（でん）の乳母　式部卿の宮乃中務（なかつかさ）の御乳母なりし

四巻にあり

宰相の君　一品の宮高階の縁（ゑ）にらんじまうす時に

帝（みかど）これにはいとゞしく四巻にあり

右近（うこん）の君　致仕（ちじ）大納言むすめ源氏の宮に御さ

ぶらひし　堀川の大殿（おとゞ）の上まで（の）うつりてさぶらひし　四巻

にあり

斯のこゝろも此系譜を西三條逍遥院

入道尭空尊者の清紙にて精撰せる

にしたがひ此ころ他本をもて校合するに

展轉書冩のあやまりに損落の文字

又前後の錯乱あまて是非をわかさ

まへるをしとゞめくなきに考合て清

書しぬ于時安永甲午歳仲

夏日東京黄臺山釋野切臨叟誌之

ガラス使用

京乙
16
335

承應三甲午歳季秋吉辰

谷岡七左衛門板行

帝國圖書館藏

ガラス使用